石　川　雅　望　年　譜　稿　㈢

粕　谷　宏　紀
（教育学部国語科研究室）

Chronological Table of Ishikawa Masamochi (Part Ⅲ)

Hiroki KASUYA
(*Department of Japanise, Faculty of Education*)

本稿は高知大学教育学部研究報告（第二十九号・昭和五十二年八月）の掲載分につづくものである．
蕪稿を草すにあたって，いつもながら多くの図書館，文庫に貴重な資料の閲覧に便宜を賜わった．また なにかとご教示いただいた 諸氏に厚く感謝する次第である．何分不十分なものなので，ご垂教，ご批正をお願いするものである。

天明七年丁未（1787）　三十五歳

○春，北尾重政画の『絵本武者鞋』（二冊）に序文を記す。

▲王右軍の筆陳図を按ずるに，筆硯紙墨はみな戦場のそなへなれば，旌旗組練もまた文房の外に出ざるべし．良工の腕を揮ふは元帥の三軍を使ふに似たり．画家の六法は兵家の軍令にことならず．一幅の画も人の珍籍にあはんぞ軍功の爵賞におとらむ．北尾重政は丹青の道に高名ありて，実に一騎当千の倭絵なり．その筆鉾のするどきは大敵の絵難坊もただちに降参の冑をぬぐべし．嗚呼重政が筆における虎頭将軍の帷幕を出ず．されば今年も耕書堂が新刻のそこばくありといへども，此武者鞋の二冊をもて草子の地場をふみかため，みせ先に屯せる百万の主顧の中へ商ひ始めの先陣をなすことしかり．

丁未の春

□本書は天明三年版の再版本である．雅望と重政との接触は昨年あたりからはじまっている．重政は当代一流の浮世絵師であり，四十九歳の働き盛りですぐれた絵を世に送り出していた．また狂歌界との関係も持ちはじめており，すでに次代の狂歌界を担うという評価の定まった雅望に序文を請うたのも当然のことかと思われる．しかも版元は，すでに狂歌界に入りこんでいる蔦屋重三郎であった．

雅望と重政とは十四歳のひらきがあるが，重政は小伝馬町の書肆須原屋三郎兵衛の長男であるから，雅望とは同町内ということもあって，幼少のころから面識も交流もあったに相違ない．そして雅望のために後年，『新撰狂歌百人一首』（文化六年刊）の肖像画を手がけるといった関係をもつようになるのである．

○正月，狂歌絵本『絵本詞の花』（喜多川歌麿画・二冊）を編纂，および序文を記して刊行する．

▲浮世絵は菱川を祖とし，夷歌は暁月を師とす．此ふたつのものは，わざおなじからねど，姿のおかしくたはれたるかたによれるは，そのたがひめなしとやいふべき．そもそもよろづの道みな古を師とし侍れど，ざれ歌とうき世絵のふたつばかりは，水より出る氷のつめたきがごとく，すぐれたる人はいまの世に猶多かり．ことしえりたるふたつの巻は，堪能重代重三郎がくもらぬ眼鏡のゑらみして，歌は暁月が下に出す．絵はひし川が上に出べし．これやさかりの詞のはな四方につたへてにほはざらめや．

天明ときこゆる七とせむつきのはしめ　　宿屋飯盛書

▲浪の上にふしたる橋は月の夜の雲あらさるに何のりやうごく　　宿屋飯盛

□本書には刊記がないが，版元は序文に「重三郎」とあるように「蔦屋重三郎」であり，刊年はおなじく序文に「天明ときこゆる七とせ」とあるのによって明らかであろう．

本書は上巻八丁，下巻七丁の小冊子で，内容はとくに目新しいものは感じられない．所収作者は飯盛のほかに，尻焼猿人・つぶり光・柳原向・吹売咽人・芦辺田鶴丸・千枝鼻元・條門橘丸・土師掻安・浅草市人・荷造早文・鎌倉坊風・天秤まじめ・紀月兼・門限面堂・膝上胡蝶・紀定丸・待人・多羅井雨盛・勘定疎人らである．なお本書は寛政九年に再版されている．

○正月，『狂歌才蔵集』（四方赤良編）を紀躬鹿・二歩只取・頭光・鹿都部真顔・紀定丸らと校合する．また同書に狂歌十二首が入集される．

▲紀みしか・二歩只取・宿屋めし盛・つふり光・鹿都部真顔・紀定丸等よみかうがへす．天明七のとし初春（巻末）．

▲雅望の狂歌

としのはしめによめる

年のよる春をめてたいめてたいといはふおろかを山も笑ふ歟（巻一・春歌上）

市中梅

初咲の梅は秤か市ひとの二りん三りんあらそふてみる（同）

桜草の花壇の風鈴の歌に

草の名はさくらといふそ風鈴も心してまれ入相のころ（巻二・春歌下）

花満山河

山河のわけへたてなくさけはとて智者も仁者も花をたのしむ（同）

夏花

背も腹も蚤にくはれてかゆけれはよるの衣をかへしてそ着る（巻三・夏歌）

月

てる月にわれものまうす晦日にも出てかけこひをねめて給はれ（巻五・秋歌下）

鳴

蛤にはしをしつかとはさまれて鳴たちかぬる秋の夕くれ（同）

十三夜月

月よよしよもよし原の十三夜かねは九つ拍子木は四つ（同）

寄河童恋

かつはにも身はあらなくに涙川しつみて人をめかけこそすれ（巻十一・恋歌下）

ある人によみてつかはしける

歌よみは下手こそよけれあめつちの動き出してたまるものかは（巻十二・雑歌上）

述懐

世わたりの道にふたつの追分やたからの山に借銭のやま（同）

女のともし火にむかひて人まち顔なる絵に

まつ宵はきゆるにちかきともし火も男になれとかきたてそする（巻十三・雑歌下）

□四方赤良の撰で上下二冊，収められた歌は六百余首．赤良の序文を付すが跋文はない．本書は内題に「才和歌集」とあり，のちに『狂歌才和歌集』と改題出版された．

書名は「万歳」にちなんでつけられているとおり，『万載狂歌集』『徳和歌後万載集』につぐ天明狂歌の総合歌集であり，体裁も前二集と同じである．入集狂歌師は赤良直系の人たちが比較的多いが，それでも総合的立場を失っていない．内容は前二集にくらべると，さすがに低調の感はまぬがれないが，校合者に紀躬鹿以下五人を起用したことや，入集歌数からいっても若手の躍進が著しく，平秩東作・元木網の両元老が少ない．

さて本書は浜田義一郎先生もご指摘のように，上巻覊旅歌にみられる削除したらしい空白部分と，冬・離別・覊旅にかけての乱丁という疑問がある（『大田南畝』）．これは天明六年の年末に近いころ，冬・離別・覊旅の歌のいくつかを削除する必要が生じた結果のミスで，削除の原因は田沼失脚の余波であり，削除されたのは，平秩東作の蝦夷旅行の吟詠であったと思われる（前掲書）．そしてこの削除は東作と親しかった南畝（四方赤良）の自衛手段とみられる．また最終的には，南畝の狂歌界との絶縁の一因となっているようである．

つぎに雅望の「歌よみは云々」の歌についてであるが，この歌は当時から有名であって，「歌よみは…」というと反射的に「宿屋飯盛」と口をついて出るほどであった．歌意は「歌よみは下手がよい．なまじっか上手な歌を詠じたために，天地が動き出したりしたら，たまったものではない」というのであり，『古今和歌集』序の比喩のことばをうけて嘲弄している．

またこの歌の下七句の「動き出して」を「動き出され」とあるべきだという評が，江戸時代にすでに出されており，日尾瑜は『燕居雑話』巻三（天保八年序）で，つぎのように論じている．

此人のたはれ歌に，歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してたまるものかは，といへるあり．最もをかしき歌ながら斯く迄したたかに詠まんずるほどならば，如何で動き出されてたまるものかはとは云はざりけんと我は思ふ．識者の評いかむ．

日尾瑜の記しているように，たしかに「動き出されて」としたほうが俗耳に入りやすい．とにかくこの歌は，黄表紙の逆説的手法にも通じて，天明狂歌の真骨頂をしめすものといえよう（水野稔氏『黄表紙・川柳・狂歌』日本古典文学全集）．また古川柳にも，

天地のうごくも歌の諫上手（柳多留百六十二篇三十丁）

と詠まれている．

○春，四方赤良編の『狂歌千里同風』に一首入集される．

▲伯楽の人々と俳優の心もてよみ侍りける　宿屋飯盛

初とりかあけのからすかしののめに声をかけたは何やつだェ

□本書は蔦屋重三郎から刊行されたもので，その目的は南畝が新吉原の新造三穂崎（お賤）を落籍したり，巴人亭と名づけた書斎兼応接間の増築費用捻出のためであろうと浜田義一郎先生はのべておられる（『大田南畝』）．

そのためか所収作者も上毛（群馬），尾陽（名古屋）など地方在住の者がいたり，『狂歌三十六人撰』（南畝の自家出版で，本書もまた費用捻出であろうと浜田先生はのべられている．刊年は天明六・七年ごろと推定する）に描かれている新加入と思われる作者たちがかなり入集されている．そのせいか雅望は当時「狂歌四天王」と称されていたにもかかわらず，わずか一首しか入集されていない．新加入と思われる人たちが多数入集していることは，浜田先生のご指摘のように（前掲書），撰集に名が載ることは，それだけ世間に名が広められ，かつ撰者たちも利益がふえるというメリットがあるからであろう．

○春，雅望の主宰する伯楽狂歌会に，四方赤良狂文を寄せる．

▲春夜伯楽宴集序

それあめつちは万物の宿屋なり．光陰はももとせの同行なり．しかうしてきちんは閻のごとし．ねがへりをうつ事いくばくぞや．古人燭をとりてはたごにす．まことに故あり．いはんや一樽われにすすむるに，滝水をもってし，大会われにかすに筆硯を以てす．伯楽のむまぶねに遊びて，千里のこまごとをはく．今夜の秀逸はみな暁月房たり．われらが詠歌はひとり補陀洛にはづ．兼題いまだよめず．探題すでにいづ．樺焼をさいて花に座し，夕かしを呼て月にゑふ．批判あらず

んば何ぞ勝負をわかたん．もし狂歌のつがひならずんば，ばちは角力の太鼓にあたらん．
春駒のいさむ心をたねとしてよろづの言のはく楽となる
歌よみは下手こそよけれあめつちの動きいだしてたまるものかは　宿屋飯盛

（大田南畝『四方のあか』下）

□『四方のあか』は，本年までの狂文を集めて，飯盛の序文を付して本年中に刊行されたものである．さて「伯楽狂歌会」は，天明三年ごろから定例の会となっており（『狂歌師細見』），赤良も乞われれば出席していたのである．赤良のこの狂文を本年春としたのは，『四方あか』が天明七年までの狂文を集めて，同年中に刊行されたものであること，所収狂文の配列順が年代を追っていること，「辺越方人をいためることば」が，この狂文の二つ前に収められており，方人が没したのが天明七年二月二十六日であること，また「歌よみは」の狂歌が，本年春刊行の『狂歌才蔵集』に収められており，かつこの歌が二月に三囲稲荷奉納額に記されていること（『永久田家務本伝』）などの理由から推定したものである．

○二月，三囲稲荷社への奉納額（朱楽菅江撰）に狂歌を寄す．

▲狂歌師菅江撰六々歌仙の額，天明七年二月，夷曲歌の大人朱楽菅江門人等をはじめ，其餘の人の狂歌三十六首をゑらび額にものして，牛島なる三めぐりの稲荷の御社のかたはらなる額堂にかかぐ．そのあらましをうつし置もの也．

奉納狂歌三十六首

照る月の鏡をぬいて樽まくら雪もこんこん花もさけさけ　四方赤良
歌よみは下手こそよけれあめつちの動き出してたまるものかは　宿屋飯盛
はつ午にあすの未を祭らばやとにかくみのすきにまかせて　倉部行澄
郭公自由自在にきく里は酒屋へ三里豆ふやへ二里　つぶり光
よしの山去年の枝折を見ちがへてうろつくほどの花盛かな　紀　定麿
後のよは時鳥にや生れ来てわが思ふまま鳴てきかさん　大屋裏住
いふ事をみなみずにしてへちまとも思はぬ人を思ふ身ぞうき　酒月米人
わたつみの千尋の底も町あればけふは潮干の遠あさり貝　真竹節蔭
世のうさをのがれて入らん観音の山のおくなる吉原の道　一富士二鷹
はや秋も千賀のうらふく帷子に風やとほるの河原涼しき　浅草市人
大門もまづあけましてよし原にかざる松葉やいはふ扇や　柳原　向
春風の手はきくとても糸柳ぬれてくれるな花のほころび　條門橘丸
初午の神楽に巫女のはれ小袖すそにしつけのをやみゆるらん　千代有員
をのが羽の茶漬の色も新しく正月ものをきなく鶯　鰕　盛方
大ぬさをとりゐのもとの桜花先白妙にさけよかしは手　人まねこまね
吉原は世界のよつに一時の寿命をのばすひけよつの鐘　諸事行業
待ちわびし妻戸をたたくぬしはたそ又だまされし二度の水鶏に　小川町住
初ざけをくはでやまんや代金はたとへ三とせの質となるとも　赤岐双馬
見わたせばみな紅葉すに山姥にあかの他人は松ばかりなり　唐衣橘洲
ほととぎすとつておくかと山姥かみふところの奥も尋ねん　軒端松丸
立よりて見ぬこそまさめ鏡山としふる顔のあいそつかしに　稀　年成
まだくれぬ春の詠の太郎月さすがに永き花の下かな　一筋道成
かがみののみの端を雪の夕くれはみな白妙につつみ八町　垣元只住
青簾まきたつ山の中の町秋はそばへもよせぬ夕ぐれ　萬　唐丸
さへかへる寒さに霜のふる袴ひだの細江の春のあけぼの　大井千尋

ぬすむとも汐の干がたの桜貝よしや名にたていその白なみ　読人白寿
うつむいてばかり居ずとも姫百合の花のかほをもちとあげよかし　赤松秀成
足はたび手はふところにおさまりて雪をながむる御代ぞめでたき　門限面倒
春になりて残りすくなき塩ざけをこぞのかたみと思ひけるかな　今田部屋住
なれもまた思ひにむねやこがしけん灰色の色の猫の妻恋　唐来参和
のぼるまだこぞの空なる鐘つきのことしへ下りる明六つの鐘　高利苅主
真白く兎の杵につきあげてあたりをよごすぬか星もなし　土師掻安
一りんもこよひは空にかけねなしこれぞ正札つきのしろもの　腹唐秋人
鞍も世話省もいらぬと山里の花の使にのるはだか馬　問屋酒船
争はぬ風の柳の糸にこそ勘忍袋ぬふべかりけれ　鹿津部真顔
治れる御世はいさめのつづみにもこけこうとなくとりぞかしこき　朱楽菅江

天明七年丁未二月　窪　俊満鐫

額の大きさ丈け三尺あまりなり，幅九尺程，縁りは朱ぬり，紋所地がみに三ツ巴は金の高蒔絵也．がくの面は黒らう色塗，草引および文字は浅く彫て，唐の土に密陀のあぶらを交へ，白く出せり．尤手際なる事賞すべし．是は小伝馬町のかたらに庵を結びし狂歌師尚左堂窪俊満といへるものの造りなせしと（千阪麻斎書『江戸一斑』）．

▲「うたよみは下手こそよけれあめつちの動き出してたまるものかは」の秀句ありて世に名をしられ給ひき．さる歌は三囲稲荷奉納の額にしるして年号もあり（『永久田家務本伝』巻十一）．

□現在三囲稲荷社にはこの額は残っておらず，その内容は『江戸一斑』の記すところにしかその拠り所はない．雅望の門人山田早苗の著わす『永久田家務本伝』の記事もわずかで詳細は不明である．

この奉納額は『江戸一斑』によると，蒔絵の沈金彫に長じていた窪俊満の作で，贅を尽していたようである．その額に当代人気の狂歌作者三十六人（三十六歌仙にならって）の作品を彫り込んだということは，さぞ世人の目をそばだてうわさされたことであろう．雅望の狂歌も『狂歌才蔵集』に入集されており，この奉納額によってますます注目されたことであろう．

○五月二十一日，江戸各所に米騒動起こる．雅望らも粥などで日々を過ごす．

▲春より米の価高く，巷に餓死する者あまたありて，我も人もたしなめられしこと甚し．町つかさの命をうけて粥を調し食ふ．これとも米価いや増しに尊く，後にはここらのあたえをつくしてつのりぬれど，商人の家には米を売らず．五月二十一日にやありけん．人起こり立ちて東都にある限りの米商ふ人の家をひたこほちに壊す．門戸屏障となく，ことごと打ち破られぬ．此騒ぎどもただならず．暁方にはみな官吏に捕えられたるとか．これよりいや増りに米の価尊くなりもてゆけば，米をいささか洗たるに，豆，小豆の類をしたたかに入れて食ふ事とするに，皆腹を損こことなひて，患ふ者少なからず．この年の苦しき事思ふべし（『とはずがたり』）．

▲天明七年五月，米直段張紙百俵に付五十二両，町相場初は百二十両位，中頃百五六十両，五月十七，八日頃百八十二両にいたる．小売百文に付，四合より三合五勺，二合五勺にいたる．所々茶飯菜飯等やすみて商売せず（『一話一言』）．

▲天明七年五月廿二日，廿七・八・九日に江戸町人附駈米屋及富家打潰，白昼民家へ押入乱妨．依之大名屋敷よりも人数さし出町家を救．我家にて江戸を警固す．板木打人数繰出し，町家にては半鐘打鳴し，早拍子木を打，人数を集め賊徒を拒む．同月廿三日御先手十組町方拒き披仰達，於所々賊徒搦捕，世上静謐となる．同六月江戸米価大に貴．金一両に付一斗八升売，公儀より金三万両，米六万俵町々へ披下賜ふ（佐久間長敬『江戸町奉行事蹟問答』）．

□大田南畝は『一話一言』に，この米騒動について実に詳細に記しているが（引用したものは一

部），江戸市民を二十五日ごろまで不安にさせた出来事であった．雅望の苦労は『とはずがたり』にいいつくされている．この騒動は二カ月後に登場する新老中松平定信のいわゆる「寛政改革」の前兆であった．

※八月九日，山手白人没す．

□本名布施弥二郎という幕府勘定所留役であった．天明元年ごろから，赤良と親交があり山手連に属していた．『万載狂歌集』『徳和歌後万載集』『狂歌才蔵集』に入集，とくに『徳和歌後万載集』には序文を記している．享年五十一歳であった．

○八月十四日夜，赤良・菅江・橘洲・真顔ら二十余名とともに，庵崎の墨堤に虫聞きの筵をひらき，諸虫の題にて終夜狂歌を詠ず．

□この会は当代人気狂歌師の勢揃いの感がある．庵崎は隅田川の東岸向島辺をいうが，ここは文人墨客の杖引く地であった．近くには鯉料理で有名な「葛西太郎」があったが，当夜は酒，芸者をまじえず，残暑を大川を渡る川風で払いながら，墨堤にすだく虫の音に耳を傾けつつ，狂歌を詠じながら初秋の一夜を過ごすという風流な会であった．この会は蔦屋重三郎の肝入りで開かれ，その成果は翌年喜多川歌麿の名を高めた作品の一つとして挙げられる，『画本虫撰』と題して蔦屋重三郎より，雅望の序文を付して刊行されたのである．

※この年の秋か冬ごろ，大田南畝狂歌界および戯作界と絶縁する．

□南畝の文芸界との絶縁について，従来種々の説があり定かでないが，浜田義一郎先生は『狂歌才蔵集』にみられる不自然な削除が直接の動機と想像されている（『大田南畝』）．

浜田先生は筆禍説を否定されており，あくまでも前記したように，平秩東作・幕臣土山宗次郎との関係においてとらえておられる（前掲書　129ページ～132ページ）．とにかく南畝は文芸活動を停止し（のちに狂歌を作りはしたが），まったく狂歌界と絶縁したのである．

○この年に刊行されたと思われる，大田南畝の『四方のあか』を編集する．また序文を記す．

▲このふみや四方の赤の一本気にして，かりにも水くさき駄酒をまじへず．もとより巴人亭の本店につみて，かつて呑口をだにひらかざりしを，おのれひそかにこれをうれへて，こたみ琉球のかがみをひらき樽底のおくをさがし，徳利のかけたるをおぎなひ，四斗樽のもれたるをあつめて，しるしの杉のはん木にのぼせぬ．もしきき酒の口功者あらば，きたりて名酒の味をなめよ．暖簾にしるき扇巴これを居酒屋の門につけて，一字の損益をまつといふ．　　宿屋飯盛しるす

□『四方のあか』は周知のように，この年までに書かれた狂文などをまとめて刊行したものである．内容については何種類も翻刻されており，容易に目にふれるので改めてふれない．

さて出版年であるが，浜田先生は「この年内に出版されたものと思われる」（『大田南畝』巻末の略年譜）とのべられておられるが，このことは『享保以後江戸出版書目』の天明七年十二月二十三日の条に記されているので問題はない．しかし「四方のあか　全二冊　飯盛著　板元　西村源六」と同書に記されており，少しここで論じたいのは圏点をつけたところである．

まず冊数であるが，二種類あって（架蔵），

Aは合冊で丁付が上赤一～同三十，下赤三十二～同六十となっており，丁付は通し番号になっている．いずれも上巻・下巻の目録を付している．刊記はなく巻末に下記のような書物の広告を載せている（半丁分）．

三十六貝狂歌合　汐干土産・絵本虫えらみ・同生写　鳥類・獣類・魚類・鶉衣・続鶉衣・四方のあか・続四方のあか・狂歌三十六歌仙・続狂歌三十六歌仙・野夫鑑・傾城鏑・吉原揚枝・曽我糠袋・和唐珍解

Bは上下二冊で，丁付は合冊本と同じである．下巻末に「書林　御江戸本町筋北ェ八町目通油町蔦屋重三郎寿桜」とあって広告はない．そして摺りがAにくらべて甚しく悪い．

推定であるが，Aは明らかに旧蔵者が上下を合冊したもので（上下の間を半紙で仕切る），初版本に近いものであろう．Bはさきの『江戸出版書目』の記事からすれば後刷りであろうと思われる．本稿ではこの問題を論じるのが目的ではないので，せんさくはこのぐらいにしておく．

さて圏点の箇所についてであるが，天明七年という年は変革のあった年で，政治上では田沼意次が前年失脚し，本年六月に松平定信が老中首席となり，七月に早速文武奨励令を出して，いわゆる江戸三大改革の一つである「寛政改革」をはじめた年であった．一方この政治変革の影響の波をもろに受けた文芸界は，『文武二道万石通』（喜三二）・『鸚鵡返文武二道』（春町）・『天下一面鏡梅鉢』（三和）・『黒白水鏡』（琴好）などの黄表紙が，時局批判のかどで絶版，また山東京伝の洒落本三部作の絶版と作者の処罰，版元蔦屋重三郎の処罰，恋川春町の自殺死の噂，雅望の江戸払いといった暗い出来事が寛政にかけてあいついで起こった．

大田南畝もこの例にもれず，平秩東作とともに田沼一派の勘定組頭土山宗次郎（のち死罪）に関係したため狂歌界から離れ，平秩東作も「急度叱」の処分を受けたのである（『大田南畝』）．したがって『四方のあか』出版の手続きも，公儀を憚って「飯盛著」（編纂者ではあるが）として届け，版元もそのころから目をつけられていたであろう蔦屋重三郎ではなく，西村源六にしたのであろう（浜田先生は，田沼一派の土山宗次郎との関係をはばかって，『四方のあか』を門人宿屋飯盛の著作のごとく見せかけたことがあった＜『四方のあか』と『狂歌才蔵集』・文学論藻二十五号＞とのべられている）．

○この年ごろより，倹約によって家計の危機をのがれる．

▲このころより我家にも，もはら倹約といふことをなして，費えを省き，よろづに意を用いて営みける故にや……（『とはずがたり』）．

□天明六年一月二十二日未明の大火により家財一切を失い，五月に二百余両を借金し，新築工事や父豊信の一周忌の法要などによって起こった家計の逼迫は彼を苦しめたことであろう．またこのような内部的原因のほかに，昨年六月から七月にかけての大洪水，飢饉といった天災，また松平定信老中就任による新政の遂行，米価の不安定といった外部的事情も糠屋の台所をおびやかしたことであろう．

しかし雅望は父の没後生まれかわった．一家の主人として，糠屋の経済的危機を倹約によって，立派に切り抜けたのである．

○この年，『狂歌天の川』（中一冊）を蔦屋重三郎より刊行するか．

□『狂歌書目集成』によると，蔦屋重三郎から刊行されたことになっているが，いまだ本書の所在を知らない．出版関係の資料や『国書総目録』，蔦屋重三郎関係資料などを博捜したが不明であった．したがって疑問としておき後考をまちたい．

○この頃か，狂歌四天王の一人にあげられる．

▲（前略）真顔・飯盛・金埒・光の輩ついでおこり，是を狂歌四天王と称せし（後略）（『狂歌弄歌集』序）．

□天明五年に『俳優風』に立役巻頭「極上上吉」をもって位置づけられた雅望は，巻軸を大上上吉で飾った鹿津部真顔，そして馬場金埒，頭光とともに「狂歌四天王」と称されるまでに狂歌師として不動の位置をしめるに至った．

これは大御所四方赤良が，本年狂歌界より退隠したことや，唐衣橘洲・朱楽菅江・元木網・平秩東作らの不振によるものであった．なお『増訂武江年表』は，天明年間の狂歌の名家として飯盛の名をあげている．天明八年以降の狂歌界は，この四天王を中心に森羅万象・奇々羅金鶏・窪俊満・三陀羅法師・浅草市人といった次代をになう新進気鋭の者たちにとって代わられるのである．

○この年，『天明新鐫百人一首古今狂歌袋』を編集し刊行する．

▲撰者　宿屋飯盛

画工　北尾伝蔵政演

書肆　東都本町筋北ェ八町目通油町

蔦屋重三郎梓

と巻末にある．

□本書は前年刊行の『天明新鐫五十人一首吾妻曲狂歌文庫』と同じスタッフで編集刊行されもので，天明狂歌ブームにのった狂歌と浮世絵の綜合をしめす第二弾の書であった．内容は古今の狂歌師百人の肖像に狂歌を添えたものであり，政演（山東京伝）の彩色美しい肖像が掲載されている．そして四方赤良の序文，朱楽菅江・唐衣橘洲・万象亭・手柄岡持・四方赤良らの戯文，平秩東作の跋文が色どりを添えている．

前年の『吾妻曲狂歌文庫』をはじめとして本書の刊行は，版元蔦屋重三郎の手腕によって，狂歌・浮世絵の綜合という新しいスタイルを生み出した，いわゆる「狂歌絵本」といわれるものである．とくに当代新進売り出し中の喜多川歌麿を起用，そして朱楽菅江や飯盛と結んで狂歌流行の波にのったのである．この期の狂歌絵本をあげるとつぎのようなものがある．

絵本江戸爵　菅江編　歌麿画(天明六)・絵本八十宇治川　北尾重政，紅翠斎画(天明六)・絵本吾妻抉　北尾重政画（天明七)・絵本詞の花　飯盛編　北尾重政画（天明七)・画本虫撰　宿屋飯盛編　歌麿画（天明八)・絵本和歌夷　歌麿画（寛政元)・絵本狂月坊　紀定丸編　歌麿画（寛政元)・絵本普賢像　歌麿画（寛政二)・絵本銀世界　歌麿画（寛政二)・百千鳥狂歌合　赤松金鶏編　歌麿画（寛政四)

永井荷風はこのような狂歌絵本の盛行について，『江戸芸術論』で「天明寛政の頃は独り狂歌の全盛を極めたるのみにあらず江戸諸般の文芸美術悉く燦然たる光彩を放ちし時代なり．ここに浮世絵と狂歌とは絵本及摺物の板刻によりて互に密接なる関係を有するに至れり」（狂歌を論ず）と記している．

さてここで煩雑をいとわず，四方赤良の序文・平秩東作の跋文を掲げておく（東北大学図書館狩野文庫本による)．

士に百行あり女に百 媚あり百工ハその 器 を利し百 姓ハそのなりハひを勤む百年の今ゆたかなる時にあひて百家の言のは繁りゆく中に百番の謡の内外となくざれ哥の百詠にふけり言葉ハ百富士の山をなし思ひハ百川のながるる如し人ごとに百和の香をふくみ家々に百錬の鏡をねれりかかれば百のはなのあしたより百 鵠 のさえずりはじめて百千かへりなく郭公にたハれたる名をなのり百里を 鷺 すなるかみに臍を宿がへさせ百のさかづきの夕にうかれ百一遍の秋を惜み百草のかれ野にさまよひ百鬼夜行の年の夜まで又ハ三浦の百六をいはひ深草の百夜とちぎり百度参の神をいのり百八の珠をくりくさくさのうた百日百ばいいにしへ今とをいハず折からの紅葉の吸物小倉の山の山くじら百目ばかり宿屋飯盛が飯がひの片手わざ百膳のけこにもれるなりそれ駕籠ハ百ましの空にとび魚ハ百堀の渕に躍る 必 しも百敷のふるき百人一首の哥がるたをとらんとにハあらずただ百一升の太神楽わこさまがたの目をよろこばしめんとなり

四方山人書



跋

狂極好門宿屋飯盛嚮に五十人一首を著して其主を画にし今年また夷曲百詠を撰ひ壁と見ず障子に押さず唐丸にあたへて世の雅観となす予系譜に暗しといへども秣かる鎌倉に宿屋左衛門の墟址あり盛ハ其後か担和田の一族は家の紋龍膽なれば仮令七兵衛と号すとも平家の残党ならざる事明なり性質直にして人を可せず交遊苟も合ん事を求めず飲食に至りても悪むところもつとも多し学を好ども經生の寒酸をいとひ倭歌をよめども縉紳のむま口を嫌ふ浮屠をなまくさしといとひ俳士をしやら臭しと笑ふ文を愛すれともまぎらかしの万葉を喰ハす倹をなせどもなめ過たる不遜をにくむたた好むところ二番に狂歌なり然といへども酢の過たる鱠を退け歯ぬかりのする炙を吐く斯に知ぬ撰実に撰にして飯盛か名の精をいとハず切てまた磨く始てともに箸を下すべきのみ

平秩東作述

天明八年戊申（1788） 三十六歳

○春，大田南畝自宅で「訳文の会」を催す．雅望も参加する．

▲天明八のとし春の頃，諸子とともに訳文の会をなす．よりて孟子の文を仮名にかきて本文をしるし，文章の稽古とす（『増訂一話一言』巻五）．

□前年，狂歌界と絶縁した南畝は，勤務のかたわら漢文の勉強にひたり，門人たちと詩会などを開いたりした．しかし彼の関心は漢詩文ばかりでなく，文章にもむけられた．それが「訳文の会」である．

この会は『一話一言』にも記されているように，『孟子』の章句を仮名に書き改めて，訳文の稽古をする会であった．雅望もこれに参加したのである．その成果ともいうべきものが『通俗醒世恒言』（寛政二年刊）で，つづいて作品が刊行され，雅望をして和文家としての名声を高めることになるのである．

ちなみに『一話一言』に掲げられている和訳ぶりを原文と対照させると下記のようなものであった．

『孟子』（公孫丑篇第二）

采人有閔其苗之不長而揠之者．芒々然歸．謂其人曰．今日病矣．予助苗長矣．其子趨而往視之．苗則槁矣．

和 訳

もろこし宋の国に百姓あり，その作る所の苗のながくのびざるをまだるしとて，手をもってその苗をぬいて引のばしけるが，おろかなる顔つきにて帰りて，家内のものにはなしけるは，今日つかれはてたり，われ苗ののびざるゆへに，手をもってたすけて引のばしたりと，その子おどろきいそぎてゆきみれば，苗すなはちかれたり．

『一話一言』には，そのほか訳例として『孟子』の「滕文公篇第三」の章句や『平治物語』の「光頼参内之事」などをあげており，「訳文の会」の性格の一端をうかがい知ることができる．

○春，『画本虫撰』を編纂し，かつ序文を記して，蔦屋重三郎より刊行する．

▲けふなん葉月十四日の夜（注・天明七年），野辺にすだく虫の声きかんと，例のたはれたる友どちかたみにひきゐて，両国の北のよしはらの東，鯉ひさぐ庵さきのほとり隅田の堤に氈うち敷てて，おのおの虫のねだんづけの高きひくきをさだめんとす．故ありて酒と妓とをいましめたれば，わきめよりはしは虫のゑんとやいふべき，なにがし寺のねぶちの声，虫の音にまじりてほの聞ゆるなど，かのぐえんじの建立ありし姫宮の持仏堂も思ひ出られて哀れなり．されば朝市のふるものあつかひよと人いふめれど，ただにやはとて，長嘯子のえらび玉へる諸虫歌合せの跡を追て，恋のこころのざれ歌をのばへ侍るに兎角して夜もふけ侍し．江山風月常のあるじなければ，

地しろをせむる大屋もあらねど，草のむしろのまらうどゐはなく，虫こそあるじなれとて，露けき方にうち向ひて，ねもころにぬかづきて立ぬ．これなん三百六十のひとなかまのいやなりけらし．

□本書は大判上（八丁）下（七丁）二冊で，喜多川歌麿描くところの極彩色摺りの豪華狂歌絵本である．天明六年の『吾妻曲狂歌文庫』以来，蔦屋重三郎は狂歌と浮世絵の綜合において手腕を発揮してきたが，このたびは歌麿と飯盛を結びつけることによって，狂歌界にがっちりと根を下ろしたのである．

本書は昨年八月十四日夜に，庵崎辺の墨堤に当代一流の狂歌師たちがつどい，虫聞きという風流な催しをしたときの成果で，狂歌に合わせた歌麿の絵は傑作といわれ，浮世絵研究家から「写生的手法を生かしたもので，ことに描線をきわめて細かく，しかも淡く用い，淡彩調の色彩によって彩ることによって，植物の立体感を表現することに成功している」（菊地貞夫氏『歌麿』浮世絵大系・集英社刊）とか「美人画の歌麿が珍しく虫蝶，草花を描いた作品として貴重なものである．歌麿は従来の静物画にこだわらず，虫類，植物に息吹きをあたえ，まさに生命そのものをとらえている」（太陽浮世絵シリーズ『歌麿』解説・平凡社刊）などと評価されている．

またこれらの評は，歌麿の師鳥山石燕の「心に生をうつし，筆に骨法を画法にして，今門人歌麿の著す虫虫の生を写すは是心画なり」という跋文（下巻）と軌を一つにするものである．つぎに収載されている狂歌を掲載順に記しておく．

（上巻）

蜂　尻焼猿人
こはこはにとる蜂のすのあなにはやうましをとめをみつのあちはひ

毛虫　四方赤良
毛をふいてきすやもとめんさしつけてきみかあたりにはひかかりなは

けら　耶奈伎波良牟加布
あたしみはけらてふ虫やいもとせのゑんのしたやにふかいりをして

はさみむし　桂　眉住
みし人を思ひきるにもきれかぬるはさみむしてふ名こそ鈍けれ

馬追虫　唐衣橘洲
夜々は馬おひむしのねにそなく君に心のはつなのはして

むかで　鹿都部真顔
ねかはくは君かつはきにとけとけととけてねふとの薬ともかな

虻　紀　定丸
耳のきはの虻とや人のいとふらんさしてうらみむはりももたねは

芋虫　條門橘丸
いも虫に似たりや似たりころころとわかれちさむき舟の小蒲団

蚓　一筋道成
よる昼もわからてまよふ恋のやみきみをみみすのねをのみそなく

こうろき　此道くらき
こうろきのすねとや人の思ふらんうらむまもなくおれてみすれは

ひくらし　百喜斎森角
人目よしちよつとこのまに抱ついてせはしなきねはひくらしかとも

くも　つふり光

ふんとしをしりよりさけてねやの巣へよはひかかれるくものふるまひ
　蝶　稀　年成
夢の間は蝶とも化して吸てみむ恋しき人の花のくちひる
　蜻蛉　一富士二鷹
人こころあきつむしともならはなれはなちはやらしとりもちの竿
　松虫　土師掻安
蚊屋つりて人まつ虫はなくはかりなにおもしろきねところじやない
　螢　酒楽斎滝麿
佐保川の水も汲ます身は螢中よしのはのくされゑんとく

（下巻）
　蟇虫　立花裏也
暗の夜に西はとちやらわかねともしのふあまりのかくれみのむし
　兜虫　唐来参和
恋しなは兜虫ともなりぬへししのひの緒さへきれはてし身は
　蝸牛　高利刈主
はれやらぬその空言にかたつふりぬるるほと猶つのや出しけん
　轡虫　貸本古喜
かしましき女に似たるくつわ虫なれともちりりんりんきにやなく
　はつた　意気躬里成
おさへたるはつたと思ふ待夜半もたたつま戸のみきちきちとなく
　蟷螂　浅草市人
くつかへる心としらてかま首をあけて蟷螂のおのはかりまつ
　赤蜻蛉　朱楽菅江
しのふより声こそたてね赤蜻蛉をのかおもひに痩ひこけても
　いなこ　軒端杉丸
露はかり草のたもとをひきみれはいなこのいなと飛のくそうき
　虻　千枝鼻元
かきおくる文もとくろをまき紙につもる思ひのたけはなかむし
　とかけ　問屋酒船
きらはるるうらみや色も青とかけ葛葉ならねと這まとふらん
　きりきりす　倉部行澄
さのみには鳴音なにてそきりきりすふか入壁も耳のある世に
　蟬　三輪杉門
うき人のこころは蟬に似たりけり声はかりしてすかたみせねは
　蛙　宿屋飯盛
人つてにくとけと音をふるいけのかいるのつらへ水くきそうき
　こかねむし　小籬菅伎
あはれともみよまくらかのこかねむしこかるるたまのはひよるの床

※五月，土師掻安没す．

□本名榎本治右衛門といい深川に住む．狂歌界に入ったのは『万載狂歌集』以後で，『大木の生限』『太の根』にはじめて顔を出す．そして『狂言鶯蛙集』にも入集し，天明五年に別荘で「夷

歌百鬼夜狂」の催しを斡旋して参加したり，そのほか『狂歌新玉集』『俳優風』『千里同風』などの撰集にも入集している．享年七十余歳であった．

※十一月九日，内山賀邸没す．

▲この年いかなる年にやありけん．あふげば高き天明ときこゆる八とせ……霜月に先師身まかりたまひぬ（『増訂一話一言』）．

□四方赤良・唐衣橘洲・朱楽菅江・平秩東作等の師であり，狂歌界への功績が大であることは改めていうまでもない．享年六十七歳．

寛政元年己酉（1789）　三十七歳

＜一月二十五日改元＞

○春，『歴代武将通鑑』（北尾重政画・六冊）に序文を記す．

▲（前編序）本邦歴代の正史を読得んこと，大人といへども難かるべし，況童子の蒙昧なるものの，何ぞ是を看ることを得ん．爰に武将通鑑といふ文あり．いまだ其作者を知らず．或のいはく北尾某が自画自註せるものなりと．予閲してその事実を考ふるに，はなはだ正史にちかし．之を童子に与へて竹馬と鳩車とに撰しめば，教へずして故事を諳じ，且懲悪の一助をなさんとしかいふ．

天明己酉春　　伯楽宿屋主人誌

□本書は『日本歴史図会』（国民図書・大正九年刊）に複刻されているように，鎌倉時代初めより慶長末にわたって，武将に関する逸事四十九話を選んで記したもので，蔦屋重三郎から刊行された．

雅望は北尾重政のために（天明七年参照），またも序文を記し「伯楽宿屋主人」と署名をした．これは雅望の本業を表わしており，また狂歌とは無関係の書であるため「宿屋飯盛」と署名しなかったのである．

○春ごろ『絵本和歌夷』（喜多川歌麿画・一帖）に序文を記す．

□未見であるが，『絵本虫えらみ』の巻末広告に「絵本和歌夷　興ある絵に狂歌を添る」とある．本書は天明六年ごろから，蔦屋重三郎より精力的に刊行されつづけられている，いわゆる狂歌絵本の一種である．榎本雄斎氏の『写楽』（人物往来社刊）によると，書名は『狂歌春遊稲謌夷』で，跋文を鹿都部真顔が叙している．なお『国書総目録』は「和歌」に分類し，寛政四年刊としているが誤りであろう．

※三月八日，平秩東作没す．享年六十四歳．

□天明狂歌の功労者として，また文筆家として，江戸文芸史上その名を忘れることができない平秩東作が没した．東作の人となりについては，森銑三氏の「平秩東作の生涯」（森銑三著作集・第一巻）にゆずるが，雅望との交流について同書は「（飯盛は）東作には二十七歳の後輩であったが，東作はよく飯盛を容れ，飯盛は東作の人物が温かで，実意があって，物のよく解ってゐたのに対して，また特別に好意を寄せていたらしい．飯盛の狂詠には，東作に関するものが相当多くあり，その編著『万代狂歌集』には，東作の狂歌を特に多く載せてゐる事実がそれを證する」とのべている．

この記事は雅望と東作の関係を端的に表現しているが，とくに『万代狂歌集』に，東作の歌を多く入集していることはたしかで，二千二百十二首中百十一首（ちなみに四方赤良は百十九首）を占めている（拙著『万代狂歌集』古典文庫）．

※七月七日，恋川春町没す．享年四十六歳．

□江戸文学史に「黄表紙」という新しいジャンルを切りひらき，狂歌師酒上不埒としても天明時代に活躍した．彼の死は折から松平定信の新政が吹き荒れていたことや，彼が駿河小島藩士という士分でありながら『鸚鵡返文武二道』を著わして，暗に新政を諷刺したということで自殺した

と噂された．このあたりの事情はついては浜田義一郎先生が「恋川春町一倉橋家文書および二三の考察一」(『国語と国文学』昭和三十四年八月号) で詳細に論じられて おられるので それにゆずることにする．

○初秋ごろ『通俗醒世恒言』の稿成るか．

▲跋文に

寛政己酉初秋書于伯楽橋南蛾術斎

石川雅 印 印

とある．

□跋文にあるように，秋ごろ脱稿したのであろう．『享保以後江戸出版書目』の寛政元年十二月二十五日の条に，

通俗醒世恒言 全五冊
畳付百九丁
寛政元
ぬかや七兵衛訳
板元願人
西村源六

とある．つまり本年末に出版許可願いが出され，そして翌二年大田南畝の序文（漢文）を得て刊行されたのである．なお本書については寛政二年の項を参看されたい．

○この年，鳥居清長の「雪月花東風流」(中判・蔦重版) の「十枚続の結（花嫁)」に狂歌を載せる．

▲花嫁の雪の帽子に月のかほうひうひ四季をあつめてぞみる

□「雪月花東風流」は，八枚揃いの版画で，(一) 武蔵野 (二) 隅田川 (三) 王子村 (四) 三つまた (五) 向ケ岡 (六) 仲の町の花 (七) 十枚続の結 (八) 三囲という構成になっている (樋口康麿著『浮世絵師鳥居清長』)．

本作を寛政元年としたのは，平野千恵子著『鳥居清長の生涯と芸術』の作品目録によった．

○この年刊行の狂歌絵本『狂月坊』(喜多川歌麿画) に狂歌を載せる．

□彩色摺り大本一冊．蔦屋重三郎の刊行で，紀定丸が狂歌を撰び序文を記している．狂歌は七十二首収載されている．歌麿の画は「須磨の浦」「月宮殿」「田家山月」「月明山水」「吉原妓楼の月見の宴」の五図である．『歌麿』(浮世絵大系・集英社刊) の解説によると，浮世絵的な図は「吉原妓楼の月見の宴」だけで，他の図は中国やわが国の大和絵や狩野の作風を感じさせ，師匠の鳥山石燕から学んだやや自由な描法による作品である．

○この年より，蛾術斎および雅の号を用いるか．

□この年までに雅望は「宿屋飯盛」という狂名のみで狂歌界，いや文芸界に生きてきた．ここではじめて「蛾術斎」および「雅」なる号を使用したらしいと思われる．

それは寛政二年刊行の『通俗醒世恒言』の跋文に「蛾術斎」と記し，かつ「石川雅」と署名しているからである．

では「蛾術斎」の号の由来はどのようなところにあるのだろうか．まず雅望の子孫である西山清太郎氏の記事を紹介する (「石川雅望翁の家系」浮世絵志八号)．

蛾術斎なる 別号があった．これ亦如何なる 方面に用ひたのか従来不明であったが，最近市川七作氏の尽力で図らず 其作品を手にする事を得た．これは 淡彩の市川家歌舞伎十八番の 内なる「暫」の絵であって，右肩に蛾術斎なる楕円形の落款がある．これにより蛾術斎なる号は専ら絵画に用ひられた事が初めて明了になった．

西山氏は上記のように「蛾術斎」の号は絵画のみに用いたとされているが（たしかに文中に挿入されている「暫」の絵に「蛾術斎」の落款がかすかに判読できる），私見をのべるならば，この号は絵画用のものではなく，著作や抄写の際の号であろう．

すなわち例をあげるならば，大田南畝から借用して書写した，僧契沖の『円珠庵雑記』に「蛾術斎蔵書」の印が押してあるし，また巻末の識語に「蛾術斎主人」と署名している（弘文荘名家真蹟図録・昭和四十七年）．同様なことが『雅望書入本狭衣物語』（国立国会図書館蔵）にもある．

この号が広く知られていたことは，津村正恭の『片玉集』巻三十四（宮内庁書陵部蔵）に「蛾術斎謾筆」と題して，雅望の日本古典文学の国語学的メモが収められていることでも明らかであろう．

ではこの号の由来はどうなのか，ふたたび西山氏の言に耳を傾けよう．

礼記に「蛾子時術之」とあり，蛾は蟻の義であって，蟻の子は微虫なれども，時に親の為す所を学び土を銜みて蟻塚を作り，遂に大塚を為すに至るといふ処から，親豊信の為す処を真似て，画を描く事を意味するものなる事が分った．然し一説には蛾子とは蛾の児にあらず，子とは数ある小虫の意義，時とは年中といふ意義，術は述なり，技術といふにあらず成功といふ意義であって，蟻塚の如き小虫と雖も年中撓ゆまざる時は必ず大塚を成功するの意味であるといふ．いづれにしても蛾術なる語源は前記の礼記から出てゐるに相違ない．

私は西山氏のいわれるように（「画を描く事云々」は承服できないが），『礼記』の一節から取り，親豊信を超えたいという願望がこめられているものとみたい．「蛾術斎」という『礼記』にもとづいた号を使用したのは，彼が天明八年に南畝の「訳文の会」に参加したことによるものであろう．すなわちこの会は，はじめ『孟子』の和訳を練習していたのであろうが，順次漢籍や漢文体の文章の和訳をも手がけていったことであろう．そこでふさわしい号ということで，『礼記』より得たとみたい．

つぎに「雅」であるが，これはのちの「雅望」（寛政三年より用いるか）という号と関係しており，「しとやか，おくゆかしい」という意にとりたい．

寛政二年庚戌（1790）　三十八歳

○元日，明け方に不吉な夢をみる．

▲去年（注・寛政二年）の睦月朔日の明け方の夢に，この君（注・奉行）の下知にて，木戸屋（注・同業者か）とともに，ひとや（注・牢）に入し夢見たりしが，かねてかかることあるを先祖の告給ひしにやといとど心細し（『とはずがたり』）．

□この夢は正夢で，翌寛政三年に雅望は南町奉行に召喚され，その結果，江戸払いという刑に処せられ文芸界から一時引退するのである．

※五月十八日，浜辺黒人没す．享年七十一歳．

▲本芝二丁目の三河屋半兵衛といへる本屋剃髪して歯を黒く染め青き道服を着たり．色黒く肥りたる男也．狂名を浜辺黒人とよぶ．人皆歯までの黒人とあだ名せり．此人狂歌の点をして半紙に摺り出す板料を取る事を入花といへり（今の狂歌の点料を入花といふの始め也）．時の諺に黒人は文覚を油揚にしたるが如しといへり（『奴凧』）．

□天明狂歌の元老の一人ともいうべき人であった．本名を斯波孟雅，字を子頌といい，通称を三河屋半兵衛という本芝二丁目の書肆であった．

黒人は前句付の場合と同様に，江戸市中の所々に取次所を設け，報條を掲げて「歌数多く御出し被成……彫刻料一首一分つつ可被遣候」と狂歌撰集のなかでよびかけ，また主宰する芝連の狂

歌会には，入花料として四十八文とったといわれ，最初の職業狂歌師といわれている．

安永八年の摺物を合綴した『栗能下風』に四方赤良の序を付し，天明元年に『初笑不琢玉』を赤良の序と唐衣橘洲の跋を付して，それぞれ刊行したが，これらは天明調狂歌撰集の嚆矢といわれている．

○春ごろ，大田南畝に序文を乞い，『通俗醒世恒言』（五冊）を山城屋忠兵衛より刊行する．

▲ 序

子相不嘗六籍之糟粕．而渉猟稗史．不勤千秋之事業．而放歌夷曲．玩於世無不閲．亦於世無所求．偶読醒世恒言．訳以国字．曰止児啼．予読之．恍如不假象胥而晤言於一堂．不出戸庭而葦航於万里也．其可怪可悦．可以懲悪．可以勧善者．豈啻止児啼哉．亦足以裨世教也．夫雷同勦説以称経生．割裂補綴以列文人者．於世何益矣．果哉子相．降志辱気．舎彼取此．稗史夷曲以為恒言者．抑醒世之意乎．無乃玩世之徒乎．

寛政庚戌孟春

南畝子題於牛門之杏花園

▲跋文　醒世恒言求多磨滅不可読者舎略読其可読者精言諸書者不復載也且名物称呼彼此異趣聊翁大意以止児啼杜撰之責未必辞云

寛政己酉初秋書干伯楽橋南蛾術斎　石川雅 石之雅印 子石相

□本書は「訳文の会」における成果を最初に問うたものである．原典は中国明末の文人，馮夢竜（1574—1645）の著わした白話体小説『醒世恒言』の一部を翻訳，意訳したものである．

馮夢竜は江蘇省呉県の人で，字を猶竜，耳猶，子猶といい，香月居顧曲散人，姑蘇詞奴，江南詹，詹外史，茂苑野史氏，箋箋居士などと号した．彼は思想家（陽明学の左派であった李卓吾の流れをくむ）であり，文筆家でもあった．彼はとくに文筆家として民歌，民間説話，小説，戯曲などの収集整理と創作にあたった（『アジア歴史辞典』平凡社）．

『醒世恒言』は四十話の短編から成り，雅望はそのうちの四話をとりあげている．対照させると下記のようである（原典は上海・作家出版社編輯部刊・1956年5月による）．

巻	醒世恒言	巻	通俗醒世恒言
六	小水湾夭狐貽書	一	小水湾夭狐貽書（シヤウスイヘンヨウコオクルショヲ）
十八	施潤沢灘閧遇友	四	施（シ）-潤（ジユン）-沢（タク）灘（タン）閧（アツニ）遇（ノアソ）友（トモニ）
二十八	呉衙内鄰舟赴約	二	呉（ゴ）衙（カ）内（ダイ）鄰（リン）舟（シウ）赴（ワモムク）約（ヤフニ）
三十四	一文銭小隙造奇冤	三	一（イチ）文（モンノ）銭（ゼニ）小（ショウ）隙（ケキ）造（イタス）奇（キ）冤（ヘンヲ）

『通俗醒世恒言』の作品論は，本稿の目的ではないので省くが，後年雅望は『醒世恒言』を『天羽衣』（文化五年刊）の直接素材に使用している（麻生磯次著『中国文学と江戸文学』）．つぎにその翻訳ぶりを「小水湾夭狐貽書」によってしめすと，

＜醒世恒言＞

話説唐玄宗時，有一少年，姓王名臣，長安人氏，略知書史，粗通文墨，好飲酒，善撃剣，走馬挟弾，尤其所長．従幼喪父，惟母在堂．娑

＜通俗醒世恒言＞

昔在唐玄宗ノ時長安ニ王臣ト云者アリ．粗書ヲヨミ酒ヲ好ミ善剣ヲ撃馬ヲ走ス狭弾ハ尤長スル所也．幼父ヲ喪タダ母ノミ堂ニア

妻干氏，同胞兄弟王宰，膂力過人，武芸出衆，充羽林親衛，未有妻室．家頗富饒，童僕多人．一家正安居楽業．不想安禄山兵乱，潼関失守，天子西幸．王宰随駕扈従．

リ．干氏ヲ娶テ妻トス．王臣ガ弟ニ王宰ト云者アリ．武芸ニ達シタル故，出テ羽林親衛ノ官トナル．未妻ヲ娶ラズ．此兄弟家頗富．童僕多アリテ安居ノ業ヲ楽シガ想ザルニ安禄山ガ兵乱起リ，玄宗皇帝蜀へ落サセタマヘバ，王宰モ御駕ニ随ヒテゾ往ケル．

上記の一例を読んで明らかなとおり，単に翻訳したというだけで，雅望独自の解釈，文体がみられず翻案というところまで高められていない．なお本書は『通俗小説奇事』（四巻三冊）と改題出版されているが刊年不明である．

○夏ごろ，天明六年一月の大火で焼失した家の増築が完成する．

▲こぞの夏（注・寛政二年），家居も広げ（『とはずがたり』）．

□上記によると，焼失以前より家が広くなったようである．

○七月七日，雅望が会主となり，某所に「七夕狂歌会」を催す．

□寄りつどえる者たちは，頭光・大屋裏住・鹿都部真顔・唐来参和・少々道頼・紀定丸ら二十余名であった．この会の成果は，翌三年歌暦の画を付し『絵本天の川』と題して刊行された．

○同日，「七夕の説」を記す．

▲　七夕の説

からくにの俗つたへていへらく天河の東に美麗の女あり．つねに機織を事とせり．天帝その独ずみを憫み，河西の牽牛に嫁せしめ給ひしに，そののち歓を貪るのみにて，聖天さまの煮こごりのごとく，ふたたび織紝のわざをなさず．天帝怒て河の東に帰らしめ，只一年に一度あはしめ給ふとなん．かうやうのふるごともかの桂陽城の太郎次郎が夜ばなしよりや起りけん．此事我国に行れしは，天平勝宝七年なりと公事根元に見へ侍れど，天平六年七月に文人をして七夕の詩を賦さしむと続日本紀にしるしたれば，その年数のあがりさがりは比叡富士ほどの相場ちがひとやいふべき．いま博物志を閲するに，槎に乗たる酔狂ものが天河がもとに至りて牽牛織女にあひたる時，ここはいづこと問ひけるに，巌君平にとへといはれて，跡の辻番へ帰りしは八月の事なれば，七月七日に際りたる星合とも定めがたし．よしや逢ふ夜はいつにもせよはねをならぶる鵲のいだきあひたる御むつみよとおもひのほか，郭翰とのころひ寝に，牽牛の御めをぬき給ひしこそ興ざむる心地はすれ．もとよりいづれの文，いづれの歌に詠じたるも，みな織姫のよばひにして橋に船の御苦労あること，これなん天の羽衣の裾はりたる御方なるべし．御床入の刻限は八雲御抄にいちじるしけれど，高き処の噂なれば，たがききいだしけむ物とよみたるなにがしの狂歌のごとく，音も香もなき上天の御事務のとばりに，かしこみたる屏風の雲のうちぞゆかしき．

庚戌七月七日　　宿屋飯盛

□この戯文は翌三年刊行の『絵本天の川』の序文ともいうべき性格をもって巻頭を飾った．そして同書が寛政九年に再版されたとき，その書名として使われている．

○冬，神田に別宅を建てる．

▲かうだという所にせばき地を持たりしが，これも去年の冬（注・寛政二年），新しく家造りて置ぬ（『とはずがたり』）．

□神田に父祖伝来の土地があり，そこに家を新築したということである．この記事について関連した事柄（とくに雅望の出生地について）は，『石川雅望年譜稿 (一)』（高大国語教育・二十四号・昭和五十一年十二月刊）で詳述したので参看されたい．

○十二月までに，家居再建にともなう負債を返済する．

▲からうじて寛政二年極月までに，人の負目みなつぐのひ果てたり．喜ばしきことかぎりなし（『とはずがたり』）．

□天明六年一月二十二日の大火によって焼失した家を再建するため，土地を担保に遠藤某などから借金した二百余両を，この十二月までにすべて返済し終わった．それは「もはら倹約といふことをなして，費えを省き，よろづに意を用ひ」た雅望の血のにじむような努力のたまものであった．

○この年，『画本著聞集』刊行の予告があるが未刊に終わる．

□唐衣橘洲編『狂歌初心抄』（寛政二年刊）の巻末に，

画本著聞集　宿屋飯盛撰　北尾紅翠斎画

全十冊近刻　当時狂歌師詞徳のありしを絵にうつし並に其物語をのべたるなり

と蔦屋重三郎から予告されていたが，結局これは刊行されなかった．

○この年刊行の狂歌絵本『絵本普賢像』（喜多川歌麿画）に狂歌を載せる．

□彩色摺り大本（一冊）で，頭光の序文を付して蔦屋重三郎から刊行された．五図の歌麿の画のあとに，九十四首の狂歌が十丁にわたって収載されている．この五図は「吉原の桜」「御殿山の桜」「上野山の桜」「飛鳥山の桜」「小金井の桜」で，いわゆる江戸およびその近郊の桜の名所を描いている．

○この年刊行の狂歌絵本『絵本銀世界』（喜多川歌麿画）を編纂し，また序文を記す．

□未見であるが，彩色摺り大本（一冊）で，例のごとく蔦屋重三郎から刊行された．『歌麿』（浮世絵大系・集英社刊）の解説によると，「宮中の雪」「酒宴の雪」「雪の引舟」「雪の墨堤」「唐土の雪」など，雪を扱った五図の歌麿の画である．

浮世絵研究家たちによる本書の評価は，『絵本狂月坊』（寛政元年）にみられる自然描写よりいっそう自由な描写であり，歌麿がこのような作画にも長足の進歩をとげたことがわかるという．

なお本書を雪，『絵本狂月坊』を月，『絵本普賢像』を花に見立てて，雪月花の三部作という．

○この年，天明六年刊の『絵本武者一覧』が『絵本武将記録』と改題再版される．

寛政三年辛亥（1791）　三十九歳

○二月某日，二男七次郎生まれる．

▲寛政三辛亥年，七次郎出生早世ス（『永久田家務本伝』巻十二）．

▲七次郎はことしの二月うまれたれば（『とはずがたり』）．

□孫太郎（のちの塵外楼清澄）につづいて男子が誕生したが，寛政九年八月十四日にわずか六歳で世を去った．

○三月，『狂歌部領使』（二巻付録一巻計三冊）を唐衣橘洲・鹿都部真顔と編集して刊行する．

▲狂歌部領使　全三冊　墨付七十一丁

寛政三亥

板元売出　つたや重三郎

（『享保以後江戸出版書目』寛政三年三月二十五日割印）

▲狂歌部領使　角・力・付録三冊

寛政三亥とし初春　つぶり光序

通油町蔦屋重三郎板（見返し）

▲狂歌部領使　諸君の高吟をみらみ四季を分つ（『絵本虫撰』巻末広告）

□本書は狂歌絵本の一種であるということであるが（『川柳狂歌集』日本古典文学大系），そうではなく単なる狂歌撰集である．昨年末までに編集が終わり，本年三月末に売り出し許可が出された

と思われる（『享保以後江戸出版書目』）．雅望の歌はつぎの十五首が入集されている．

恋

松となりても生出んあだ人の仮寝の夢の臍のあたりに

萩

短きも長きもあれば涙ほど露ちる亀と鶴のはぎ原

恋

仏をばたのむな君が後の世でひよつと変生男子ではいや

老後恋

あふ事ははや世にもれてから橋のさしこむ詮もなき病かな

初冬

貧乏の神は出雲へたつとはやよねも黄金もふゆとこそなれ

雪

あたたまる人の五体は河豚にして仏を作る中庭の雪

歳暮

寒餅の仕舞の臼のひと杵とともにことしの年もつきにき

霞

先陣にたつはかすみてけふははやよほどはるひの延びて候ふ

恋

我命あふにかふべきしるしにはしのぶ戸口にいきをころせり

菊

寿老人ほどに御むりのしら菊は星とよばれて杖をこそつけ

恋

しのぶ夜は刀のはのねふるはれてさし足もしつぬき足もしつ

落葉

奥山の紅葉ちりぬる梢には松が斧より外になはなし

恋

あふた夜に恋の病はいへぬれど又わかれ路に行なやむなり

恋

仲立の取あげばばに思ふ事いふてふくるる腹を見せばや

○四月二十七日，母没す．

▲四月廿七日没　四役　心誉智覚信女　糠屋七兵衛母（浅草正覚寺過去帳）

□俗名享年は一切不明である．雅望にとって最愛の母が亡くなった．この母は糠屋の家付きの娘であり，夫豊信とのいきさつについてはすでに記したので省略する（「石川雅望年譜稿 (一)」高大国語教育二十四号および系図(一)参照）．

母の死の模様は『とはずがたり』の冒頭に記されているが，それだけこの母に雅望は深い思慕を抱いていたのである．煩を厭わず引用しておく．

寛政三年四月廿七日，年頃なやみ給ふ母の例よりは，心地悪しく胸痛めるよしの給て，咳入り給ふ事常ならず．時は亥ひとつばかりにやあらん．家の内の人起まどひて騒ぐ．安右衛門急ぎ来り，かき抱きて湯まいらす．鍼医栄庵藤俊常など近隣りなれば，とみに走り来て，鍼灸すべき所はかたの如く行ふ．されどひた弱りに弱り給ひて，いといと頼しげなきに，歯の根ふるひ心地まどひて，せんすべなう悲しさやらんがたし．昼までは常より心よげにをはして，そよといへるを

うなのきたれるを，酒など調してもてなししゐ飲ませ，自からもひとつばかり飲み給ひつつ，肴なる魚のすまいりなど，いとのどかにふるまひ給へりしかば，かかるとみのことあらんとは誰も誰もおもひがけず．

暮れつかたには孫の梅なる者が，弟の孫などいとみきほひて，いぶりなかせつるをさなせそ．をうな手はおほとかにしつやかなるそよぎ，かかるはしたなきことは男の子こそすれ．おとなしからずはもぐさとうでてはらやかんとす．をのれをのれとの給ひつるを聞き，さしでてにげていぬるうしろ手，しれじれしき様やとうち笑ひ見遣りゐ給ひし．さは今宵，俄のことあらんには，かの中よりいささかなやみ給ふ色もみゆべきをさもなく，もしくは魚の鮓一つ二つは召して，それがとどこほりて，かかるめ見せけるかと，人々さまざまに言ひ騒ぐ．妻なるものは神仏に祈りて，命助け給へとて泣きまどふ．

臥し給ふ所は小さき塗籠の内なれば，人集ひていよいよ所狭きさまなり．迎にやりし医師もいまた来らず．あきれまどふほどに，はや絶へ入り給ひぬ．悲しきこと言ふも愚かなり．呼び生まいらするさへふつに声出でず．しばしありて息出で給ひぬれば，嬉しくて湯を御口にそそぎ入るに，目を開きて，そこら見給ふ様なればものはの給はず．いかにや御心たしかにせなどいへど，耳の聞え給はぬにや，答へだにし給はず．熊の胆煎じて持てこといへど，置所を失ひたりといふ．あはてて塗籠を出て一間なる内に入て箸やうのものあなぐるに，人走り来てはや亡なり給ひぬとつく足の踏み所をもおぼえず．やおら塗籠に入てみまいらするに，ただ冷え冷え入給ひて，此の世の人とおぼえず．嫗ばらはある限り声をあげて泣く．

工藤元迪といふ医師，迎への男の子と連れ来りぬれど，こと切れ給ひぬと聞て帰さりぬ．亡き人は北枕にすなりとて，抱きて直しまいらするを見るに，心きももつぶるばかりに覚ゆ．屏風引き廻ぐらし，御灯ともし，机に香たきて枕飯とのいふもの筒に盛りて奉る．失せ給ひぬと聞て，幼き者共も起いでつつ，灯の蔭にかひひそみゐたるを見るに，いとど涙もとどめあへず．宿れる旅人も心篤きは来りて悔み弔ふ．その夜は柱に寄りて明しぬ．

○四月二十八日，頭光に葬式の相談をする．

▲二十八日，あたり近き人縁者はさらなりすべて親しく睦みたる人々訪らい来る．悲しきが中に此人々に詞かはさんも苦しきこといはんかたなし．宇右衛門なる人は，ことに日頃交はり篤ければ，つと立そひて葬送のこと などなにくれと扱ひものす．かうやうの式なにひとつ欠けたらんも，ものうき事也とて，こまやかにかいもとむるなど，歎きの中にうちまぜ忙がはしくかしまし（『とはずがたり』）．

□上記文中の「宇右衛門」とは，亀井町の町代の岸宇右衛門のことで，狂名を頭光という．雅望とは狂歌ではもちろんのこと，日常生活においても親しき仲であった．

○同日，通夜をおこなう．

▲御寺へは朝とく人を走らせつ．野辺の送りは廿九日の辰の刻と定む．暮れつ方哲相院より僧来り．経よみ亡き人の髪下ろし参らす．沐浴は文蔵，安右衛門，五郎兵衛などものせり．さて棺に納めまいらせて，こなたなる一間にいだし奉る．夜居の僧うちもねず．夜一夜鉦打ちならし念仏す．心細き事たとふるにものはなし（『とはずがたり』）．

○四月二十九日，浅草黒船町正覚寺において盛大な葬儀をおこなう．

▲二十九日，朝げとくしたしめて送りの用意す．常は遠ざかりうとき人も来りて送に供す．哲相院より所化の僧来て道の案内す．遠きも近きも知りたる限り集ひあつまりて，棺のしりへに歩む．すべて三百人ばかり．棺に添ひたるもの安左衛門，文蔵，九兵衛，忠兵衛，伊兵衛みな元結を払ひたり．やつがれ源太，親族の内聖天町に住める重兵衛など，人みな編笠かぶりて行道のほど，空を歩む心地して午の刻ばかりにかしこに至りぬ．

棺は先，哲相院の持仏堂の前に据へたり．あるじの僧，所化など経よみ終りて，さて正覚寺の本堂に昇ゆく．ここにて僧衆二十人ばかり，読経念仏して院主外に両三人の僧，かはるがはる引導の偈を唱ふ．焼香にあづかる者三十四，五人．鉦鼓の声いと尊し．ここにて送きたれる人をねぎらひ，それぞれにいやまひまうす．法事終りてをのがししやどりに急ぐ．

帰り道も目は霧にふたがれるが如く，夢路をたどる心地せり．帰つきてみるに，騒々しきこと昨日にまされり．親しき限りより香花仏供など贈きたれる．つかひの隙なきもいと思ひがけずなん（『とはずがたり』）．

□江戸後期の中産階級の葬儀の模様がうかがわれて興味深いものがある．過去帳に「四役」とあるように，母の葬儀は父豊信のときよりも盛大であった．江戸時代の家族制度によれば，当主は絶大な権力を持っていたのであるから，当然当主の葬儀は盛大であったはずである．しかし過去帳によると豊信の時は普通であったとみえ，何も特記されていない．母の葬儀が「四役」ということは，推測するに糠屋家の跡取り娘，家付き娘という理由からであろう．

○四月晦日より四十九日の間，墓参を欠かさず．

▲卯月晦日をはじめとして，中陰の間は朝ごとに御墓に詣でぬ．日なしおきつどころは，父の御墓に隣たれば便いとよし．昔召使ひし人，はた親族のともがらより，手向ものせる樒がすそひて石碑の前も，いと所せきざまになん（『とはずがたり』）．

□「中陰」とは，人の死後四十九日間のことであるが，雅望は四十九日間毎朝正覚寺に詣でたのである．上記文中にある「石碑」とは，父豊信のための大田南畝撰文による墓碣銘（天明五年の項・『高知大学教育学部研究報告二十九号』所収拙稿「石川雅望年譜稿(二)」）と思われるが，すでに記したように幕末に焼失しており，現在はそのよすがをしのぶものは何ひとつ存在しない．雅望は墓参のたびに，亡母への愛惜をつのらせ，つぎのように記している．

母君若くより，子ども数多失ひ給ひ，ただやつがれひとり残し止め給ひぬれば，いつくしみなで養ひ給ひこと世の常にあらず．さるを千々がひとつの孝養をだに尽さず別れ参らせしこと口惜しき．後悔先にたたずとかやいへるふるごとも，いま身の上に知られて人やりならず．悲しくこころきもも，此時にみな失せぬるにやと思はする（『とはずがたり』）．

○五月七日，亡母の遺言により，土地を長男孫太郎に譲渡することを決める．

▲五月の七日の日，名主なる人の家に行きて，同じ町のうちに持ち伝える荘地を孫太に譲らんことを告ぐ．こは亡き人の遺言なればなり（『とはずがたり』）．

□この記事によって，糠屋は住居のある土地以外に，小伝馬町三丁目にもう一カ所，規模は不明であるが土地を所有していたことがわかる．その土地を他界した母の遺言によって，長男に譲渡しようというのである．

これは法的にいうと「跡式相続」（財産相続）で，『徳川時代の文学に見えたる私法』（中田薫著）によると単独相続ではなく分割相続ということになる．したがって糠屋の家屋や，それが建っている土地は相変らず雅望のものということになる．

○六月五日，長男に土地譲渡の書類を名主へ提出する．

▲さるを名主のかたに，さりがたき公務ありとて，引きしろひつつ六月五日に，券に奥書して渡しき（『とはずがたり』）．

□五月七日に亡母の遺言として，長男に土地を譲渡する旨を届けたが，名主が公務多忙のため一カ月近くも延引していたのである．

○六月十五日，亡母の四十九日の法要を正覚寺で営む．

▲みなづきの十五日，四十九日にあたり給へば，家の内の人までも寺に行きてぬかづく（『とは

ずがたり』).

○六月十六日，同業者十四人とともに，江戸南町奉行所に召喚される．

▲十五日の夜，安左衛門来りていふ．あす己の刻，町つかさより召すことありと．何事にや心に覚えたる事なしと胸つぶれてをののく．翌日かしこに至りてみれば，宿屋のあるじ十四人ばかり召されてをのをのかしこにあり．なでう事にてかくは召されたるならんと，かなみに問かはせど定かなることなし（『とはずがたり』).

○六月二十日，この頃より持病の痔に悩む．

▲廿日のころより，例のいさらゐの病いに冒され苦しきこと堪えがたければ，森某といふ医師に見せなどして久しく臥しゐたり（『とはずがたり』).

□母の死，それにつづく奉行所からの召喚などの肉体的，精神的苦痛によって，持病となっていた痔に悩まされたのである．雅望は健康体ではなかったとみえ（それにしては長寿のほうであるが)，後年黄疸などにかかっている．

○六月二十八日，南町奉行所より召喚されるが，病気のため代理人を出す．

▲同二十八日，召しありけれど（いさらゐの病のため）出ることかなはで，東助を代はりにとて出す（『とはずがたり』).

○六月末ごろ，みたび南町奉行所に召喚され，白洲で吟味をうける．

▲末くだれる頃にやあらん．召されて白洲に入．町つかさ池田筑後守殿とかや，十四人の名をよび給ひ，さての給へるや，いですべて禁ちかごとき業をなす者は，片田舎の者共の訴へ事有て，宿する時申文に彼等がいわざることぐさを書添へあるは，こしをしといふことをなして訴への日数を延へ，はた事済みて罷らんずる時，訴へ文を書たる料，又はここらの力を添へたる料とて，黄金いくばくをこせなど，田舎の人のもとよりさるしろを取れるばやなど，かかるは腹黒き事やはする．包まず申せ．もしをし隠していはずば，ひと屋に籠めつべし．といみじういきまきの給ふ．

やつがれかかるつたなき生業し侍れども，親の教へを守てさるきたなき心は露つかひ侍らず．されどあまりにゆくりなく，かかること問はれ参らせてあきれまどひたりしが，答へせでは悪しかりなんと思ひて，さることゆめ覚し侍らずといふ．残れる者らも同じこと答ふ．

そがうち誰かにか有けん，さる不義の財は受けず侍れど，旅人の心によりて，いささかの謝物を贈るあり．これはもらひて侍りといふ．司の君いはく．呉れるはとて貰ふべきかはさる物受くる．心からは例して黄金たまへといひたらんにたがはじとて受け引き給はず．又のたまふは，県司の召し使ふ者の中に，中番といへるあり．はじめて訴へ文を出せる田舎人よりは謝儀なりとて，黄金一けた，あるは二けたばかり遣はすを汝等取り次て贈ぬるよし，門守にもあし二三十足あまり遣はせるよし，さることありやとの給ふ．

こは二百にあまりぬる宿屋共，古くよりしかしなせしことにて，をのれらに限れることには侍らず．まいてかの謝物を遣はさざれば，はたりてさまざまのまがごと申せば，せんかたなくてかの口ふさがん料に贈つかはしたるといふ．さこそあらめ猶静かに沙汰すべし．十四人の者等は，隣伍の伴に預くるなり．罷り立ちねとの給ふ．それより吟味場といふ所に至れば，与力吉田百介といへる人出て，十四人の者のいふべきこと，物に書つけて明後日までに持てこと言（『とはずがたり』).

□いささか引用が長すぎたが，この事件は雅望の一生を変えた．またこの事件によって狂歌界から一時退き，狂歌作者から和学者へと転身する契機ともなったのである．春秋の筆法をもってすれば，この事件が和学者，文章家石川雅望の生みの親であったといえよう．

さてこの事件のあらましはというと，引用した『とはずがたり』によれば，地方から訴訟のた

め江戸に出てきた者に，訴訟の便宜を計ると称して，不当な金銭を宿屋が強制したというのである．

当時訴人が江戸に出てきたときに泊まる宿は，たいていきまっていて馬喰町付近に集中していた．こういう宿を「公事宿」というが，雅望の経営する糠屋は公事宿ではなく一般の旅宿であった．これは雅望自身「やつがれが家に宿する旅人は，多くは商人または堂社に詣づる人ばかりにて，訴へ事にて足を止むる人は十が一になん侍る」（『とはずがたり』）とのべていることでも明らかである．

取り調べの奉行は，引用文中にあるように池田筑後守長恵で，寛政元年に南町奉行となり，同七年六月二十八日大目付にまで昇進した敏腕の官吏であった（『寛政重修諸家譜』）．この日の吟味は，よほど精神的にこたえたとみえ，雅望は「その夜宿りに帰りても，うつし心もなうそぞろにもの悲しきこと限りなし．いかなる人のしりうごとにて，十四人のうちにかすまへられ，もの憂目をみることにや．世の常も公けのことは，せちに思ひ慎しみて，いささかのたゆき心のをこたりなりなどはいたらぬものを，まして人の訴へ事のひきしろひ長かれかしなど思はんことは，あまつ神もみそなはし給へ．さばかりまかれる心は無きものなどと，さまからさまに思ひ廻らすに，終夜いをだに寝ずなりぬ」（『とはずがたり』）と記している．

それから二日ばかりして奉行所に弁明書を提出した．これは馬喰町，伝馬町の歴史を記したもので，後年『都の手ぶり』に収められた「ばくろの町」の下敷となっている感がある文章である．

○六月末ごろ，旅宿の営業を停止する．

▲いぬる水無月の末つ方より，営みを止めてひたぶる籠りぬれば，貯へたるものも遣ひ果てつ．家の内塵積みぬれど払ひ捨つる事もなく，瓦落ち障子破るれども，ひき繕ふべき頼りだになく，秋の野良もかばかりには荒しといふほどに荒れ渡り（『とはずがたり』）．

□謹慎の意味で営業を停止したのであろうが，家内の荒れようがほうふつとする．

○七月某日，姉・祖母・父の盆供養をおこなう．

▲文月にもなりぬ．今年父は七年にあたり，姉なる人は二十七年，祖母は三十三年にぞなり給ふける．年月の過ぐるは矢の如しとは，今更に驚かれて昔のみ恋しう盆の供養も常よりはまめやかに悲しうなん（『とはずがたり』）．

□無実の罪に問われて詮議の最中での盆供養である．雅望の気持はまさに「常よりはきめやかに悲しうなん」である．祖母（父豊信の実母）は宝暦九年十二月十七日，姉は明和二年九月三日，父は天明五年五月二十五日にそれぞれ没している．

○七月十三日，無実の罪を述懐して歌を詠ず．また頭光に贈歌．

▲十三日，御許しかぶり月代をつまむ．

身になさぬ罪とししらばあはれともみそなはしてよ天地の神（『とはずがたり』）

▲岸右衛門(ママ)なる人のもとへ

うきをとふ人もやくるとまきのとをあくればさむき秋の朝かぜ

かかるつたなきことは，此外にもこころつつけぬれどみな忘れつ（同上）

○七月二十五日，奉行所へ召喚される．

▲同二十五日，又召しあり．問ひ給ふこと先の如し．みなみなかしこみて門守，中番に銭を送しはおぼしたるがごとし．旅人のこし押しして銭をむさぼりしことは，いささかもし侍らずと言時に司君いかめしき顔にまじりひろげてのたまへるやう，しなよく言葉を飾りまほに言はざるこそをこなれ．しやつらが内，次郎八めをひと屋に入れよ．且，富二郎，甚介*，幸介もともにひと屋に籠めよと声おたけく荒ららかにの給ふ．雑式いちはくこの四人を縄もていましめたり．そよの

者らも，いよいよをしつくみて言はずば，しやつらがごとくにせん．先今日は立ちねとの給ふ．恐ろしき心肝にこたへて，歩める足もたちとなくふるはる．宿に帰り来ても胸つとふたがりて，頭痛ければそのままにかづき臥しぬ．かさねての召しには，誰々もひと屋にくださるべし．かくあつしき頃，いかで命保ちてんといへば，家の内親しき人もみな集ひよりて，憂れひ思ふことただならず（『とはずがたり』）．＊24Pの「手限例書」にみえる甚助と同一人か．

○七月末ごろ，神仏に無事を祈る．

▲家のうちある限り，神につけ仏に祈りてこたみの事ことなくて，わざはひなからしめ給へとねぎごとす．浅草寺の大ひさに詣うでたる人帰きて，みぐし籤きて来れとて出す．開らき見れば詩にいへらく．離暗出明麻衣恋縁衣旧憂終是退過禄応交輝とあり．目黒なる不動尊に参りたる者も，同じ詩のみぐし取りて帰れり．百籤のうち二つながら同じ兆にて，ことに吉祥なれば神仏も捨てさせ給はねにやと，頼しくも忝けなくて涙ほろほろとこぼれぬ（『とはずがたり』）．

○八月五日，詮義場に入られる．

▲八月五日召しあり．こたみは詮義場といふ場に入られぬ．吉田百介といふ人出ていふやう，四人の者をひと屋にてきびしくかうしたづぬれば，これまで偽つつみたれどみなさることしつと白状におよべり．をのれらいかにつつみたりともかなふべきにあらず．ないつる罪の條々つばらにいべきかんと大なる声していきまきいふ．やつがれ答へていへらく，たとへて四人の者のさ申せしとて，やつがれにおきてはさることし侍らずといふ時にかの人目を開げ，はたとにらまへてをのれめ何者にやと問ふ．やつがれ名を答ぬれば，いよよなる神の嗤くごとき声して，をのれこそ名に聞えたる宿屋なれ，先にをのれをひとやに下ださざりしこそねんなけれ，よしよしいまみよ，獄に入れんずるぞ．残れるしやつらもかれがいふごとくなるや．いかにとををしきかたちまくり手にして，せむさらすといはば，とみにひとやに入れらるべし．さらば命も尊ふべしと人ごとに思ひければ，だれ答ふるともなうさることし侍りつといひぬ．この時，人々の郷里はた父の名など問ひて，その日は帰へしき．さても家々の帳簿にあはせて答へ人の限り召されて，宿屋共のいよよさるうしろめたさきわざしたりや，いなやと糺したまは，さることせぬ者は罪に陥ち入ることもあらじと，けふまではそれを頼みにわたりしに，かかる濡れ衣きて危きうしろでして罷りぬること口惜さいはんかたなし（『とはずがたり』）．

□与力吉田百介（助）の尋問に，雅望は姓名をいったが，吉田は「名は聞えたる宿屋なれ」といっている．すなわち「宿屋飯盛」の文名が与力にまでも及んでいるのである．

さてこの事件は『とはずがたり』を読むかぎり，雅望は明らかに無実であるが，時はあたかも「寛政改革」の波を皆がかぶっている時期でもある．この事件もその一環として摘発されたのであろうが，私は雅望の文芸活動をこの事件にことよせて弾圧したのではないかと推測している．このことは前記したような与力吉田のことばにもうかがえると思うのである．関根正直は『からすかご』で，このことについて「凡そ斯る大改革（注・寛政改革をさす）をなす時は細謹を顧みるに暇あらず．当時玉石共に放棄せられて，冤に泣く者も少からざりきといふ（現に六樹園石川雅望の如きも，父祖代々馬喰町の旅亭にて信用ある老舗なりしかど，他の不正なる公事宿と軒を接せし故に，他と同様営業を停止せられ，剰さへ追放の厄に遭へり．仍て雅望頻りに正邪を弁じ，冤を訴えたりしかど，遂に省みられざりき）．」と記している．

○八月七日，南町奉行池田筑後守の取り調べをうける．

▲同七日，司の君の前にて同じこと糺明ありて，四人の者庄五郎とかやもひとやを出し，なにがしくれかしに預けかへさる．これよりうちはへ召すことなくて，いたづらに過し居たり（『とはずがたり』）．

○十月六日，奉行所より召喚される．心痛のため不眠症にかかる．

▲十月六日，召されて庁に出づ．司の御前にて書記招状を読みあぐ．さて吟味場に行きてをのをの招状に印を押して罷出ぬ．ただ胸つぶれ心まどひ舌こばりて物言はれず．この事をこりてより，夜は丑過る頃は必ず目覚めて寝ることなし．一椀の飯強ゐて喫すれども つくすこと あたはず．胸いたう痛みて幾度か黄なる水を吐きぬ．この時の苦しみ思ひはかるべし（『とはずがたり』）．

○十月十八日，江戸所払いおよび家財没収の判決下る．

▲十八日朝とく起きて，例の持仏の御前にぬかづきて，両親はた先祖親族の神を拝し，朝飯したためんとする頃，南隣なる嘉兵衛といふ人来りて，只今召しあり急ぎ参られよといふ．聞より胸騒ぎて飯ものどを通らず．とく袴かいつけて出てゆく途にて，甚介，弥右衛門などに逢ひたり．連れ立ちて急ぐ．

まづ吟味場に至りて，まう来つるよし話す．同心十四人の者の名を呼びて庁の内に入れしむ．凡そ午の時計にやあらん司君出でさせ給ふ．けふは宿屋の召し使ふ者の中に県司の庁へ出入せる者などもともに召しあり．こなたに県司の門守，中番なる者据へて七，八人ばかりこれも召されてうつ伏しゐたり．司君またをのをのの名をよび給ひて，さての給はく．県司の門守，中番ら答へごとせる者よりましろとて，渡せる銭を宿屋共の取り次ぎ持て来るを，収め置きとくぶんにせる事軽からぬ罪なれば，生まれたる国はもとより，その他東海道・中山道・日光街道その余の国へも足を入れざる定めにてこれより追はなちつ．かえす間さる旨心得よ．十四人の宿屋共は酒代の取り次ぎし，且旅人の銭をむさぼりこたへのこしをしにたることなせし．これまた安からぬ罪にあなれば，家財を没収し，江戸の外に追やらふものなり．江戸の内へ足を入ることなかれとの給ふ．

宿屋の召使十五人は，過怠に手かせさして帰し給ふ．さる請文に印押し終りて，をのをの官符を出で数寄屋門といへる所より，ちりぢり別れ去りぬ．さはこれより何処をさしてゆかん．人なき山にや入べき．深き海にや身を投げまじ．知れる人に逢んもおもなければ，人け繁き所はまして道行くも心遣ひせられつつ，からうじてかしこの知れける人の家に至りぬ．ここより人をやりて聞けば，家には今朝より雑式両人きたりて，家の内の調度，衣服，かまどの具まで改め見てものに書いつけてをはすといふ．妻子はいかにといへば，子たちは隣なるおくの家にありて，ひた泣きに泣きてゐ給ふ．内のおもとは雑式の案内して調度などあつかひてゐ給へりといふ．さしもの憂き目をみることかな．

露けしと人やみるらんきのふまで涙そそぎし草のいほりは

（中略）さしも先祖の人々営み力を入れ給ひ，かうまでとり伝へさせ給ふけるを，またたきのひまにあとかたなうなしぬること，我が宿世のつたなさ，浅しくもなりはてしかなど思ひつづくれば，常よりげに勝りて袖もしとどに濡れぬ．男の子の涙がちなるは，見苦しくてあれば思ひ念じて，逢ふ人ごとに顔そむけつつ，もの語するなど心苦しきことふべうもあらず．家あるじ心篤き人にて，なにくれと懇にもてなし給ふことといとせちなり．その日せんすべなければ，そこにて夜を明かしぬ（『とはずがたり』）．

□確証がないのに，江戸払いに家財没収という意外に重いお裁きであった．雅望の驚きと無念さがよく吐露されている．結局雅望の嫌疑は，当時の裁判の遅延や怠慢によって跋扈していた公事師と同様な行為をしたというのであろう．雅望と同様な判決を受けた公事師の例があるので記すと，この男は江戸橋本町四丁目元家主甚助で「諸願公事出入ニ付罷出候旅人共ヱ申勧金銭為差出，掛り奉行所中番門番白洲番人等ヱ取次相送，且目安控等等認遣」などのため，本年十月に家財取上江戸払いとなった（「手限例書」十・旧幕府引継書）．なお公事師と密接な関連があった公事宿については，滝川政次郎氏「公事宿の研究」（『早稲田大学比較法研究所紀要』第八号）や南和男氏「江戸の公事宿」（『国学院雑誌』第六十八巻一・二号）などのご研究があるのでここでは触れない．

『とはずがたり』の記事は，当時の裁判の方法，判決の様子，刑執行の様子などが克明に記されており資料的に興味深いものがある．

○十月十九日，浅草正覚寺の先祖の墓に別れをつげる．

▲十九日寅の刻より起出て，正覚寺に行きて門たたき入，父母及び先祖の御墓にこたみの不幸を告げたてまつる．御霊のいかにわれを罪し給ふらんとそぞろにそら恐し．帰へさに哲相院を訪ふらふ．ここも許しある所にあらねば，しばしもたたずみなんは，人悪うければあはただしくとく罷出ぬ．とみかうみするまに日暮れぬればまたそこに泊りぬ（『とはずがたり』）．

○十月二十日，もとの傭人を頼って江戸近郊鳴子村に退く．

▲二十日寅の刻より起て旅用意し，主にはた旅の具など借りて暇乞ひて出ぬ．いく万代もここに住て，子なるもの孫子なるものの栄ゆく行末をも見ばやなど思ひたりし．家居を後になしつつ風呂敷背負ひて出立つ．住みすてがたき宿のあたり返り見のみせらるるぞあさましき．

昔召使ひし人の武蔵国多摩の郡に住居つつ，われはそれを便にとて行くなりけり．鎌倉河岸を過，護持院の跡を通り，九段の坂にかかる．この坂より故郷の方よく見渡されぬれば，しばしたたずみて休らふ．かしこにこそ我が家はあなれと思ふに，胸つとふたがりて悲しさすずろ也．市ケ谷の辺りに頼み参らする人有．昨日もふりはへとぶらはせ給ふことの有りがたう忝じければ，そこに参りて行末のことたのみまひらす．情深くものし給ふことの忝けなくて，ほろほろと泪こぼれぬ．ここにて文蔵に逢．よろこびて連れ立いぬ．

四谷より新宿といふを越えて一里あまり行きて，なにがしの村につきぬ．主かひがひしく懇にものして，やつがれが命あらん限りは，育み養ひまゐらすることといと安きことなり．かならずしも憂れへ給ふななどいふにすこしは心落ゐぬ．奥まりたるかたに離れたる家有．維摩の庵，ふたつあはせたらんほどして西表に建てたり．冬はさもあれ，夏の頃はさこそ暑からめと思ひはからる．東は寺にて松杉あまたおひて竹の林こちたく繁り，北の方は市倉やうのもの有て後は畠なり．ここに住ませ給ふて，憂きをも忘れ給へかしなどいふ．げに林に落ちたる猿は木を選らぶのいとまなしとかや．膝をだに入れなばことたらめとて，畳，筵やうの物求め敷てあやしの庵の主とはなれり．

久しう人住まぬ宿なれば，壁破れ庇荒れて，雨風の夜はいをだに眠られず．匠めくもの雇ひ来りてここかしこ繕はす．盗らるべきものもなきに，盗人入らせしとて，家の前にいたかきせさするなどいとをかし．辺りはよろぼひたる小家建ち続きて，枯れたる葎をだにひきもはらはず．もの思ひなくてかかる所に交らひなば，珍らしくも面白かるべきことなめりと思はる（『とはずがたり』）．

□雅望は午前四時に起きて，風呂敷包みを背負い江戸を離れたのである．その行程や心情は『とはずがたり』に書き尽されているので改めてふれない．

さてこの江戸払いに関して，従来問題になっているのは落ち着き先のことである．明治以来，諸書はこの落ち着き先を「江戸鳴子村」「府中近辺」としている．甚しいのは「府中鳴子村」と両方を混同しているものがある．この点に関して少しく私見をのべると，内藤新宿近郊の「鳴子村（成子村）」以外に考えられない．鳴子村は現在副都心といわれる，高層ビルの立ち並ぶ旧淀橋浄水場付辺である．私の根拠は『とはずがたり』にある「四谷より新宿といふを越えて一里あまり行きて」とある記事で，新宿から一里余というとまさしく「鳴子村」なのである．

次に江戸払いであるが，これは罪に応じて段階があるが，雅望のは，いわゆる朱引内（江戸御府内）に立ち入り禁止および旅行禁止であった．実は当時江戸の範囲ははっきりしておらず，各方面からの要望によって，文政元年に江戸の境界に朱線をもって示したのである（これを「朱引絵図」という）．文政元年の朱引絵図をみると「鳴子」は御府内に入っているが，雅望はすでに文

政元年の時点では江戸払いを許されているので問題はない．また同地図には緑で線引きをしているが，これは「御仕置筋ニ可当町奉行支配場境筋」ということで，「鳴子」は線外になっている．雅望が江戸払いになったときは，ここはまだ御府外であった．

さて，「府中云々」であるが，私の調査では府中に住んだという文献は見当たらない．したがってこの説は否定される．少なくとも雅望は，文化三年まで鳴子村に居住しており，文化四年に内藤新宿に移り住むが，その間居を移していない（詳細は各項参照）．ではなぜ「府中」という地名が出てくるのであろうか．それは文化六年三月二十四日に，大田南畝の多摩川巡視を慰問するため，府中宿に南畝を訪問していることから生じた誤りであろう（大田南畝『調布日記』および飯盛編『万代狂歌集』）．

○十月二十二日，亡父の夢をみる．

▲二十二日，寝入りたる夢に亡き父の来り給ひ物語し給ふ．そこの罪なきは神にもしろしめさん．まづ心にありて命養なひてよなどの給ふ．たまさかに見奉たる嬉しさに，いみじう涙こぼれぬるを思ふにふと夢は醒めにき．かかる身をも捨てさせ給はぬにやと覚えいと忝けなし（『とはずがたり』）．

○同日，妻子たちと再会する．

▲けふなん妻なるもの四人の子ども連れて訪ね来たり，姉しげはことし十になりき．梅は七つ，孫太は六つ，七次郎はことしの二月生まれたれば（『とはずがたり』）．

○同月二十五日，『とはずがたり』を執筆する．

▲（子どもたちが）人となりて後，わが親はいかなる人，悪きあやまちして公けのかうしや蒙りけんといぶかり思ふべければ，そのためにここにその由を書いつけ置て，昔をしのぶよすがともなれかしと思ひよる仕業になん．

寛政三辛亥年十月廿五日　石川雅望識

□雅望の唯一の自伝ともいうべき『とはずがたり』執筆の動機は，上記に吐露されているとおりで説明の要はなかろう．

『とはずがたり』は，『国書総目録』によれば，その性質上刊本はなく，写本が国立国会図書館．宮内庁書陵部．慶応義塾大学図書館．刈谷図書館．竹清文庫．無窮会文庫などに残っている（東北大学図書館狩野文庫に『遭厄記』というのがあるが，これは『とはずがたり』と同一のものである）．

私が引用したのは，宮内庁書陵部蔵の『片玉集』に所収されているものである．各写本には多少の語句の異同がみられるが，本文の内容に影響のない程度のものである．ただ巻末に書写した人の下記のような付記を持つものがある（国立国会図書館蔵，東北大学図書館蔵）．

一、石川雅望ハ俗称五郎兵衛狂号ヲ宿屋飯盛ト云六樹園ト号ス宝暦三癸酉年出生寛政三亥年迄三十九年ニ当文政十三年庚寅年閏三月廿四日死去享年七十八歳浅草諏訪町正覚寺子院哲相院ニ葬ス浄土宗六樹園台誉五老居士

一、雅望妻リキハ天保十三壬寅年九月廿日死去享年七十六歳同寺ニ葬ス宝倫院知誉妙清大姉

一、七歳之娘ムメ事ハ後年新川酒店ニ嫁テイト（ママ）改名セリ天明五己年出生今猶存生嘉永年中ノ事也

一、六歳之男孫太事ハ後中村屋之家族を相続し塵外楼清澄と号す天明六丙午年出生天保五甲午年四月十五日死去享年四十九歳四谷北寺町天長永昌寺に葬す塵外楼清哲大澄居士

寛政三年のこの事件は，酒月米人が『麈難誌』に「宿屋飯盛が公の御不審蒙りたるは，手もりに似て手もりにあらず」と記しているが，雅望にとってよほど腹が立ったとみえ．

国朝の法にぬす人をとらへてひとやにこめたまひてのち，さてそのぬすまれたるぬしをもめされて，そのやうをつばらにとはせたまふことあり．おもふにこは賊ならぬもののとらへられて拷杖のもとに屈招して，賊におちいるものやあらんとのかしこき御仁政なるべし．こたみわれわれか罪をかそへたまふるいかなれは，うたへごとするゐなか人はめされさるにか，めしてとはせ給はば，さる人のたからむさほりしてやいなやと，みにわかるへきことにこそあらめ．しりうごとをひとすちにまことなりとさため給ひてそならぬものを，しひてそれよとさらせ給はんには，たれかはまぬかるるものあるべき．さはいへどこれもすくせのむくひなるべければ，人をも世をもうらむべきならずといくたひか，甚しかへしぬれど，ある時はやくなきとはずがたりのせらるるおろかなる凡夫こころなるべし．

と『とはずがたり』の巻末に，悲憤慷慨をしている．

○十二月某日，大田南畝より契沖の『円珠庵雑記』を借りて書写をはじめる．

▲寛政三辛亥年十二月借南畝子蔵本謄写，同七年乙卯四月校合一通畢

蛾術斎主人

との識語がある（『弘文荘名家真蹟図録』昭和四十七年）．

□今年は雅望の一生を変えた事件が起こり，その結果鳴子村に退転を余儀なくされたが，ここで佗住いの無聊を慰めるため，国学関係の資料の書写をはじめたと思われる．そして本年から文芸界に復帰する文化五年ごろまで，国学関係の素養を積んでいくのである．その意味で『円珠庵雑記』の書写は，雅望によって重要な意味をもった仕事であった．なお本書には「蛾術斎蔵書」の印記がある．

『円珠庵雑記』は和歌の用語や語源を解説したもので，後年雅望が『雅言集覧』の執筆に当たって，大きな影響をうけたことは明白であろう．南畝から借用したものは，南畝が『三十幅』に入集したものと同一のものである．

○この年，昨年七月七日におこなった「七夕の会」の成果を編纂し，『絵本天の川』（二冊・喜多川歌麿画）と題す．序文をのせる．

□本書は乾十丁，坤十二丁の小冊子で，雅望が昨年七月七日夜に催した「七夕狂歌会」の成果をまとめたものである．版元は大阪の和泉屋源七である．巻頭に雅望の「七夕の説」という狂文（寛政二年参照）を序文めかしてかかげ，当夜参加した人たちの狂歌を一首ずつ記している．下記に参加者を掲げておく．

芦辺田鶴丸・花鳥遠州・浜真砂・千賀うしろめ・豆永金成・壁中古文・源平杭よし・御能土師丸・扇折風・海士網曳・紀もと女・紀安麿・巌松胤・堀川人成・真坂時成・右馬耳風・紀和歌女・楓呼継・一升事椥・篠野玉涌・紀定麿・奇々羅金鶏・浅草市人・園胡蝶・奈良朝起・紀軽人・菊酒壺・麦原笛成・一行亭・物野的丸・橘打枝・万徳斎・橘鉢植・山升朝樹 耳有改・伊勢あは輔・市仲住・年頼・馬道霜解・足曳山丸・桜枝鞠・紀長人・花高丸・紅浦昼過・田原船積・呉竹世暮気・高根雪人・深草春人・中よし小よし・山家広住・物事喜丸・尽語軒・十本枝成・外種庵麿・三陀羅法師・腹唐秋人・花咲千重麿・夢相・高砂浦風・鶴羽風・埒二未一人・羽合丸重・埒明兼・一富士二鷹・酒月米人・笹葉鈴成・千空万成・桂眉住・雛唯澄・人まね小まね・由縁色成・延喜金成・荷造早文・屋職堅丸・柳原向・つふり光・窪俊満・宿屋飯盛・唐衣橘洲・豊年雪丸

雅望は，

大空に恋する星のふたつ文字ひかせ給ふは牛の角文字

という狂歌を詠じた．参会者の中に橘洲がいるのが珍らしいし，新人がかなり入っているのが特徴である．版元が大阪の書肆であり，歌麿とコンビの蔦屋重三郎でなかったことは，文芸界をも

席巻した寛政改革の嵐であったことはいうまでもない．なお本書は寛政九年に『絵本七夕の説』と改題出版された．

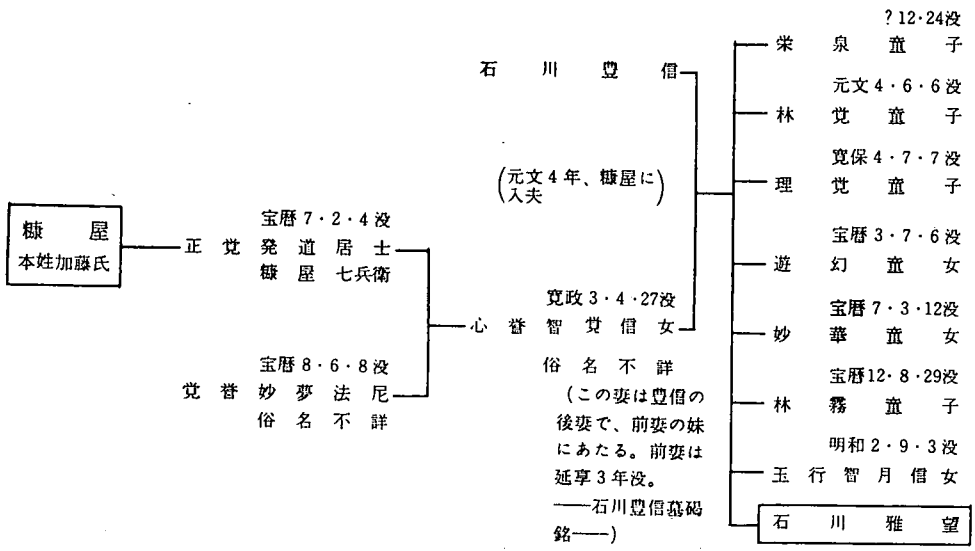
○この年，『略解千字文』に序文を記す．

（未完）

（昭和52年4月1日受理）
（昭和52年10月20日分冊発行）

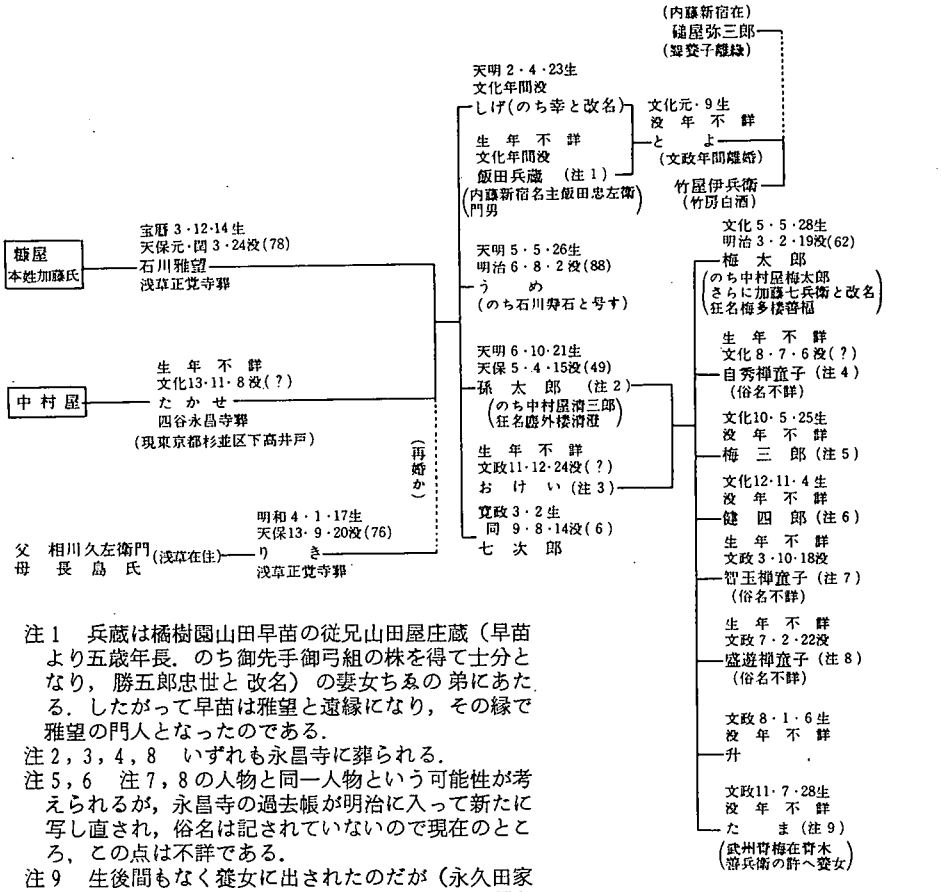
（付）　ここに石川雅望の系図を掲げておく，なお系図㈠は「石川雅望年譜稿㈠」に記したものである．

石川雅望系図　㈠



すべて俗名不詳．没年順に並べたものである．雅望を除いて生年月日は一切不明である．

石川雅望系図 (三)



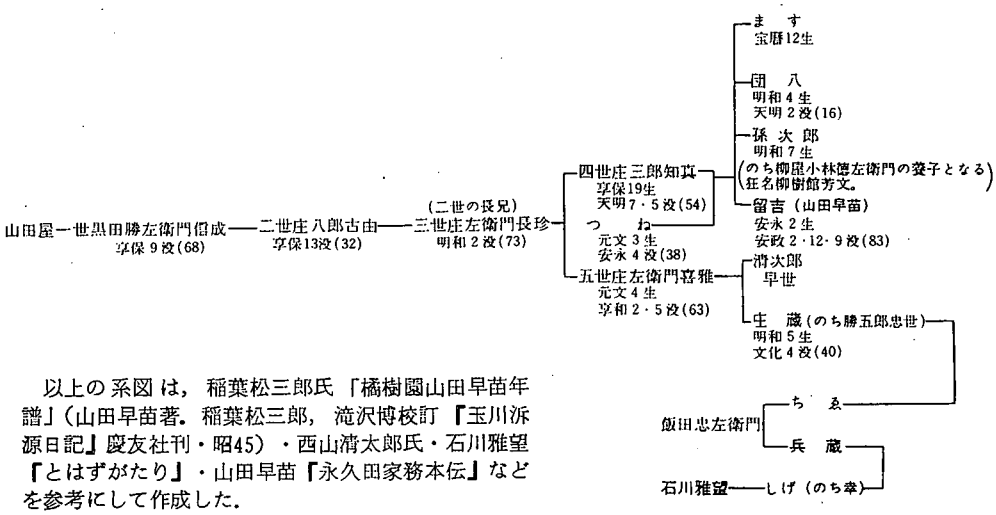
注1　兵蔵は橘樹園山田早苗の従兄山田屋庄蔵（早苗より五歳年長．のち御先手御弓組の株を得て士分となり，勝五郎忠世と改名）の妻女ちゑの弟にあたる．したがって早苗は雅望と遠縁になり，その縁で雅望の門人となったのである．

注2，3，4，8　いずれも永昌寺に葬られる．

注5，6　注7，8の人物と同一人物という可能性が考えられるが，永昌寺の過去帳が明治に入って新たに写し直され，俗名は記されていないので現在のところ，この点は不詳である．

注9　生後間もなく養女に出されたのだが（永久田家務本伝），これは生母おけいが，たまを生んで間もなく死んだためであろう．青梅に養女に出されたのは青梅の山田早苗による仲介と考えられる．

石川雅望と山田早苗の関係



以上の系図は，稲葉松三郎氏「橘樹園山田早苗年譜」（山田早苗著．稲葉松三郎，滝沢博校訂『玉川泝源日記』慶友社刊・昭45）・西山清太郎氏・石川雅望『とはずがたり』・山田早苗『永久田家務本伝』などを参考にして作成した．